

百人一首評釋



金子元臣
柴山啓郎 合著

第五版

百人一首評釋

東京 明治書院

凡 例

一、歌として古來世に弘くもてはやされたるは、この百人一首なり。初心の者讀むべく、既達の人また見るべきは、この百人一首なり。されば、これが解を作れるものい多くして、あるは初心に、あるは既達の人に趣けて、さまざまに說做せり。今この二つの趣を兼ねて、初心には覺り易からむやうに、既達の人にも參考とならむやうに、此の評釋は物しつ。

一、作者に、一々略傳を附したるは、其の時代と、其の人物の梗概とを知らぬむどての業なり。

一、字句の解釋は、極めて詳密を主とし、些の遺憾なからぬむことを期したり。

勗

- 一、意釋は極めて、謹嚴に、正確に、其の語勢句調を、聊も亂さゞらむことを勗めたり。
- 二、評は極めて、簡約を主とし、唯、其の要旨を得るにとゞめたり。さるは、鼈頭の餘白におのづから、制限あるに由る。
- 三、評は金子元臣の専ら施したる處、解釋は多く、柴山啓一郎の稿する所に屬す。

明治卅三年七月

著者 志 る す

百人一首解題

名 目

金子元臣述



百人一首とは、百人の歌を各一首づゝ選みたる意なり。そも、百首歌を集めものする事は、冷泉帝の、いまだ、東宮にておはしませしける時、源重之が、わが詠歌を四季戀雜とやうに次第して、百首献りしを、澄籙として、堀川鳥羽の兩朝に、太郎次郎の百首を當時の歌人等に召されしより以來、私にも、人々に勸めて、詠まゑめし、數寄者もありて、後鳥羽順徳の二代に至りて、殊に、盛に行はれたりき、又作者の人數をある諸數に限りて、歌集むる事は、藤原公任卿が、三十六歌仙の選などや、其の初めなりけむ、されど、其の歌數は、一人にして、數首に及べり。此の兩者の特點を取合せて、悉く、作者を異にしたる百首歌を集めしは、この百人一首に始まれる新案なりけり。さて、後にはこれに倣ひて、新百人一首、後選百人一首、源氏百人一首などいふが、數多出來しより、これらと別たむ爲に、殊に、榜標して、小倉百人一首とも呼べり。

來歴

山城國上嵯峨の中院町は、世にいはゆる小倉山の附近の地なり。鎌倉時代に、此處に中院入道蓮生といはれし人の山莊ありき。この入道をそも如何なる人ぞと問ふにもと、下野の國の住人にして、宇都宮頼綱といひける武士なりけり。史を案ずるに、

頼綱は業綱の子、彌三郎と稱す。元久元年八月、人あり誣ひて曰く、頼綱叛心あり、一族郎從等を率ゐて鎌倉に上らむとす。將軍よりて、小山朝政をして糾問せしむ。頼綱その事なきを白し、この月下野に於て、法然上人の門に入りて薙髮し、法名を實信房蓮生と號す。同日に出家する郎從六十餘人といふ。頼綱藤原爲家の高弟にして、和歌を善くす。新勅撰以下の集に多くその歌を載す。正元元年十一月十二日、京都粟生光明寺に卒す。年八十八。と見えたり。この人、元久の事に懲りて、全く浮世の煩累を斷ちて、一意専念に佛道に歸依せむが爲、かつは、風月に吟嘯して、閑かに餘生を娛まむが爲に、かの故郷を去りて、この小倉の山莊には引籠りしならむ。朝には師僧法然上人が白雲かゝれる黒谷の柴の門を驚かして、獅子吼の法音を聽き、夕には、歌匠爲家卿が二條の幽栖を音づれて、斯道の深秘を叩きしな

詠

らむ。然る間、あづから懇親に、往來せしにや。爲家卿は、遂に入道が女婿となれり。これこの卿の最初の妻にして、十六夜日記の作者阿佛尼は、蓋し其の後妻なりしなり。かくこの道に歎寄たる入道なりければ、新案の百首歌を選みて、山莊の障子の色紙形に物せむとし、爲家卿の父にして、當時の大宗師たる定家卿に、詠へて書かためたりき。これなむ、この小倉百人一首の來歴なりける。そも、古への障子は、今の如き明り障子にはあらずして、襖衝立やうの物なれば、これに繪畫を描し、あるは、色紙を貼して、歌書きなど、風流を競ひあへりし事は、道雅三位の八條の山莊なる障子の歌家經朝臣が、桂の山莊なる障子の畫の歌神宮寺また最勝四天王院の障子の歌などいふ事の、諸書に散見せるにて、知られぬべし。又、この入道が山莊の障子は、當に、歌の色紙を貼せしのみには、あらず、其の歌主の肖像をも、一々下に畫きしなり。水蛙眼目に、

嵯峨の山莊の障子に、上古以來の歌仙の似せ繪を描きて、各一首の歌を書き添へたる云々

と見ゆ。眼目の著者頼阿が師と想める、二條爲世卿の祖は、即ち爲家卿なれば、あづから、さる傳へを聞きつぎしにやあらむ。殊に當時は、似せ繪即ち今日の肖像畫いたく流行して源

隆信朝臣、その子信實朝臣の父子、尤も妙手と稱せられ、後鳥羽上皇の隠岐に御遷幸の際、なごにも信實朝臣を御駕の前に召出だされて、法體の御影を書かしめ給ひし事などと思ひ合はすれば、其の技術も如何なる程度まで進歩せしかを知るに足らむ。かゝれば、頼綱入道が、古來の歌仙の肖像書を障子に物せしもさる事にていと面白き風雅業ならずや。まして其の歌の筆者の、定家卿なりと聞くに於てをや。後世、この百首歌の下に、一々作者の肖像を畫けるが多きは、蓋し由來する所あるなりけり。

さて、その山莊には、岳父中院入道の譲を受けて、住居せられしに、や世に爲家卿を、中院大納言と稱せり。その頃よりぞ、この百首は、やうく世に傳はりはじめけるとぞ。

選者

飛鳥井家の抄、玄旨抄等の舊説にいはく、

新古今集選ばるゝ時、定家卿は父の喪に籠り居給へり。志かるに、かの集卿の心に叶はず、歌道はいにしへより世を治め、民を導く教誡の端たり。然れば實を根本にして、花を枝葉にすべきなるを、この集は、偏に花を本として、實を忘れたるにより、本意と思はざりしな

し。されば、黃門の意願はれがたき事をくちをし、思ひ給ふ故に、古今の百人の歌を選みて、山莊に置かるるものなり。

といへれど、其の諸けられぬ事は、既に古人の道破せし處なり。さるは、新古今集は建仁三年四月に、定家卿をはじめ五人の選者、選びなして献ぜられたりき。さて、其の又の年なる元久元年十一月に、俊成卿は薨せられたるなれば、父卿の喪に丁りたる程の選といふは誤なり。又歌のさま心に叶はずといは、年月過ぎての貞永元年に、卿一人して選ばれし新勅選集にこそ思ふまゝにはせられなめ、其の後文暦の頃に書かれし、この百首を待ちていふべきにはあらず。この百首の、文暦の頃に書かれしといふ證は、卿の日記なる明月記、文暦二年五月の條に、

廿七日己未、予本不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形、故予可書由、彼入道懇切、確極見苦事、慙染筆送之。古來人歌各一首、自天智天皇以來及家隆雅經卿、

とあるにて明かなるべし。さては、新古今集の風、殊如何は、定家卿がこの百首を選みしといふ理由となすに足らず。又記の文に據れば、嵯峨の小倉の山莊は、たしかに、中院入道、即ち、道生法師が所有にて、定家卿のに非ず。ひそかに、山莊の障子にあされたりといへるも、妄言な

り、今の中院町の厭離庵といふ禪室を、定家卿の小倉百首を選ばれし時雨の亭の趾とし、ひ來れるは、蓋し前の謬説に惑へる者の私に作り出でし所業にこそ、かくの如く、舊説、悉く、信ずべからず、新説はた如何にといふに、賀茂真淵の初學びには、

明月記に、たゞ、水菫事のみありて、且夜に入りて示し送るとあれば、其の日などに書きて急ぎて送られしものぞ、まかれれば歌も深く選ばれしものならねば、げに、いかにぞや覺ゆるも入りたり。

と見え、安藤年山の紀聞には、

蓮生法師も歌よみにて、集にも入りたる人なれば、こればかりのもの、選ばむ事難かるまじ、中略所詮は蓮生入道が選にても、定家卿同意に思はれたればこそ、染筆は志給ひけれ、と見え、香川景樹の異見には、

此の紀聞の考、決めて、確論とぞ覺え侍る、彼の入道より選次の事をも托せるならむには、まづ、其の事をこそ記さるべきに、そはさて置きて、ひたすら、染筆の事をもみ述べ給ふべきにはあらじ、古來の歌各一首を選出の事は、もとより筆を染むるの類ひならねば、専ら記しおき給ふべき事ならずや、次の文に入、夜金吾示送と書き給へるを見れば、只此の日

決めて

ひねもすに、彼の色紙形書終へ給ひしのみならむ、さて、まづ、其の夜取りあへず、息金吾爲家卿の方まで遣はして、嵯峨なる入道の許へは達せられたるなり、此の卿は、一時、此の道のゆかりより、勅によりて選集など書き参らせられし事まゝあり、藤泰綱の古今集書かれし事も見えたり、又、もとより、彼の入道は、此の道の達者にて、秀歌尤も世に多し、其の詠歌を見集むるに、萬葉をさへ精しくせし人なり、されば、人の選を頼むべきにあらず、そこそ、己か心たらひにせられけめ。

と見え、真淵は、猶、定家卿の選とし、他は皆、蓮生法師の選とす、あのれも亦、定家卿の選には非ずと定むる論者なり、さりとて、猥りに、多數に附和雷同せむどにはあらじ、この百首の歌體のこの卿の平生の主張と卿が矛盾する處あるを思へばなり、試に卿が老後の述作として、梶井宮尊快法親王に上られしといふ、秀歌之粹大略と比較し見よ、大略は、讀人不知を除けば、歌數百十首ばかり、作者四十二人なり、然して、其の四十人までは、この百首の作者なるに、同一の歌の、双方の選に入れるは、僅に、二十八首にとゞまる、殊に、大略には、遍照、素性、式子内親王、寂蓮家隆は各二首、清輔及び後京極攝政は各四首、俊成卿は七首、後鳥羽帝御製は六首とやうに多數の歌を收めながら、猶、この百首にある歌の洩れたるぞ、いと怪しきさてはま

この秀歌は彼れか、此れか、取捨いづれにか據るべき。一人の選と見る時は餘りに定見なきに似たり。若卒の際の執筆として、も餘りの杜撰ならずや否々この卿のさばかり定見なきにはあらじ。又杜撰なるにもあらじ。寧ろ丁寧綿密なる執拗なる性質なりし事は、卿が一生の歴史の證する處ならずや。この一事を以ても、百首の選の卿の手に成りしにあらざる事は、炳乎として、火を見るが如くならむ。况や明月記の本文既に、其の十の九を證せるに於てをや。故に曰く中院入道則ち蓮生法師の選むところと。

風 體

この百首を概括したる、古人の批評を示さむ。頼阿は曰く、

更にうるはしき一體の外別體なし。

といひ、飛鳥井抄には、前に挙げたる如く、新古今集の花にのみなれるを歎きて、その實を收めしやうにいひて、

まことに二條家の骨肉、この歌を以て俊成定家二卿の心をも探り知るべき事とぞ、師説侍りし。

といひ、細川幽齋は、

この百首の大意は實を宗として花を少し兼ねたり。十のうち實は六七分、花は三四分たるべきにや。和歌の骨髓はこの百人一首なり。餘情比類なきものなり。

といへり。この類の説は、諸書に數多見ゆれど、畢竟定家卿の選と見たるより、其の遺風を仰き、其餘流を汲める者の崇拜し讃嘆して措かざるものなり。さて近代には契沖師は、作者の〇〇秀歌の中の秀歌とて選ばれたるにもあるべからず、まめやかなる歌のよきを選ばれたりと見えたり。

といひ、眞淵は、

歌も深くえらばれしものならねばけに、いかにぞや覺ゆるも入りたり。

といへり。これらの諸家の説の當否、さては、歌の善惡巧拙は、おのれが本文の齧頭に、一々施せる略評を見もて行かば、はゞ其の一斑を窺ひて、いさゝか嚆向する處を知るに足らむ。

作 者

小倉百首の選成りて、中古の歌人は皆網羅せられたるか。少くとも第一流の歌人は、悉く、其

の選に入るを得たるか、伯樂が冀北の野を過ぎて馬群空しかりしが如くなるか、果して然らば、後選集の選者として、梨壺五人の随一としての源順はいかに六條一流の祖藤原顯季はいかに文武兩道の達者源賴政はいかに又女流にて中務はいかに肥後はいかに下りて平貞文、源公忠、在原元方、源信明、藤原高遠、大中臣賴基、同輔親、藤原長能、同範、堀川右大臣、神祇伯顯仲、源仲正、僧顯昭、馬内侍、丹後等の如き、又は後拾遺集の選者藤原通俊の如き、皆この作者たるか否か、ある名譽ある歌人にして齊しくこの選に洩れたるなり、却りてさもありぬ、作者にして入選の榮に預れるもあり、一條禪閑兼良公も、この事を心ゆかずや思はれけむ、其の楊鳴曉筆に、

源順と申侍るは、梨壺の五人、後撰の撰者の随一なるに、此人數にもれける事は、いかなる事にか侍らむ、又源兼昌は堀川院の百首の人數とは申しながら、此人數に入るべきほど

の作者には非ざるに、撰び入れられたるもいかゞ。
と、難を試みられたるは、流石に眼高の見識にて、時輩に卓越せりといふべきにこそ、然るに飛鳥井家などの古抄に、

この百首の人數のうち、世にいかめしく思ふも除かれ、させる作者と見えぬも入り侍り、

こは古今の歌詠み數を知らず侍れば、世に聞えたるも除くべき事疑なし、それは、世の心に譲りてさしおかれ侍れば、強ひておとすにはあらざるべし、さて世にそれとも思はぬ

を入れたるは、其の人の名譽顯るゝ間、最もあり難き心とぞ申すべからむ。

とあり、これ、この選の不完全なるを、略よく飾りなせる詞にして、更に公平なる議論にあらず、作者の撰擇に就きては、おのれは、大に不満を抱けるものなり。

又作者の序次に就きて考ふるに、本來、障子に貼付せる歌なれば、正確なる順序あるべくもあらず、作者の名の如きも、色紙なれば書かれざりしならむ、後世に至り、大やう時代を追ひ、歿年の前後を推して、略順序を立てられしものと覺し、古抄には爲家卿の世に弘めしものとせり、但し、明月記に、其の最初と最後とを示されて、

自天智天皇以來及家隆雅經卿

とあるに、今のは、後鳥羽順德の二帝に終れり、これを年山紀聞には、

後に次第を改めし人あるにや、はた當時の臣下なる故に、至家隆雅經卿と書かれたるか、とあるは、一わたりは、さる事として、諾ひおくべし、されど、おのれは、これに就きて、別に考ふる所あり、いで、章をこどにして、これを略陳せむ。

後鳥羽順德二帝御製考

つら／＼この百首歌選述の始末を考ふるに、奈良朝時代の歌すらあへて、萬葉集に據らず。天智帝のは後選集に、人麻呂のは拾遺集に採りて、歌主の違へるまゝに隨ひ、持統帝山部赤人ののは、新古今集の誤りを受けて、更に正す處なし。仲麻呂のは古今集に、家持のは新古今集に據れり。況や平安朝のになりては、陸奥の志のぶもちすり離ゆゑにの歌を伊勢物語に采れるを、希有の異例となすべきに似たり。それだに古今集によりて作者を河原左大臣とせり。康秀の歌六帖に従はず、基俊の歌袖中抄によらず。崇徳帝の御製顯輔及次堀川の歌、久安百首のをさしおきつゝ、かゝれば、専ら勅選の歌集を基礎として、其の中より選者の心任せに拙き出でたるものと斷言するを敢へて躊躇せざらむとす。さて其の勅選集は何々ぞ。曰く古今集、曰く後選集、曰く拾遺集、曰く後拾遺集、曰く金葉集、曰く詞花集、曰く千載集、曰く新古今集、曰く新勅選集、曰く續後選集と。以上十代の歌集は、醍醐天皇の延喜五年にはじまり、後嵯峨天皇の建長三年に訖れり。然るに百首の卷尾にある、後鳥羽順德二帝の御製は、共に續後撰集に出で、而してこの集は、

定家卿歿後十年を経過したる建長三年十一月に奏覽を遂げたるなれば、それより十六年以前、の文暦二年の百首の選に、この集の歌の入らむ事、これ不審の第一。

これを強ひて彌縫せむとせば、この二首は勅選集より采れるに非ずといふ説を立てざるを得ず。新勅選集奥書に、越部禪尼の消息に、御所達の歌を載せざるを難じたるを引取りて、右の消息の中に、御所達とあるは、後鳥羽院、土御門院、順德院、此の三院の御製を入れられざるをいへり。然れども、若し天氣許容なかりけるか、關東のは、からひか。此の事、定家卿本意ならざりけるにや。百人一首の終に、後鳥羽院、順德院二人の帝のあり難き述懐の御歌を載せられたり。爲家卿、續後撰集に二首ながら入れられたるは、父の卿の心ざしを補はれけるか、もしはいひ遺されける歟。

と見ゆ。さてはまづ百首に収めて、後に選集に入れたるが如し。然れども、こは、この百首を必ず、定家卿の選としての説なり。明月記の文中、既に選著の證據なきを、や、況や、この二首を、以て、百首の終りとせば、及後鳥羽順德天皇としも、書かるべきが當然なるを、たしかに及家隆雅經卿とあるにあらずや。これ不審の第二。

以上二個の疑團を解釋せむとせば、勢ひ當時の政界の形況を語らざるべからず。乞ふ姑く

これを聞け。

草も木も靡きし秋の霜と、將軍實朝は消えにたれど薪樵る鎌倉の山風は猶すさびにすさびて、九重の御階の櫻も橘も、枝危きばかり吹まをれたるより、後鳥羽順徳二皇の大御心殊に安からず思召されけるもとわりなり、然るに錦旗一たび出で、榛瀬に吹捲られ、再びして宇治勢田に仆れてより、あはれ、三上皇は遠き海島にいでまし、當帝はあろされ給ひ、親王達は流され、月卿雲客は殺されて、鴨川の水長へに、駒打浸す東夷の泥脛の汚すところとなりにきたまゝ、生き残る廷臣も、心にも似ぬ世の中を啣ちて、目を側め、眉を顰めぬむなかりければ、紫も、朱も、緑も、時ならぬ時雨の雨におしなべたる藤の衣の心地やしたりけむ。ひとりそが中に、北山の紅葉照りに照りたる、西園寺公經一味の徒、關東幕府の餘光を借りて、世の冬枯も知らぬ顔なるこそうたてけれ。

この時に當りて、平素、上皇の特殊の眷遇を蒙れりし、定家卿は、如何にせしぞ、必ずや、一死を以て報ゆる處ありしならむと思はるゝを、何の消息をだに洩らさうりしこそ、いと怪むべき限りにはあれ、嘉祿二年に、後鳥羽上皇の隠岐の島にて、催させ給ひし遠島御歌合の作者を見るに、當時の廷臣には、前内大臣家真、權大納言基良あり、さては、沙彌道珍即ち、承久の謀

臣たりし藤原忠信卿、歌人には家隆卿あるのみ、餘は微官薄祿の小臣少々仕へまへれり、往時、仙洞御所あるは水無瀬の離宮に、花の旦月の夕、必ず召を外れし事なかりし、定家卿は、なとて、この作者には、加はらざりしぞ、なとて、加へ給はざりしぞ、蓋し、所以あるなり、實に、彼れ、定家は、時に媚ひ勢に附きて、上皇を見捨て、參らせしなり、もとより、深く關東に依頼して、將軍家を、はじめ、武士どもを多く門下に延き、息爲家卿も、關東武士の鋒々たる、宇津宮頼綱入道が、婿となり、濟ませる程なりければ、蚤くも、西園寺家と結托して、私の榮華を期せしならむ、宜なれや、卿か選める貞永の新勅選集に、武士の歌のみ多く收めたる、甚しきは、さばかり、名譽におはします、三上皇の御製を、一首だに入れ奉らず、假令、詞にこそ出ださね、誰か其の心術を、陋とし、其の振舞を、卑しとせざらむや、猶默止かねては、宇治川集の隱語を、以て、これを譏るに至りぬ、流石の肉親なる、俊成卿女、即ち、越部禪尼すら、爲家卿が續後選集奉選の時に贈りし消息の中に、

新勅撰は隠れごと候はず候、中納言入道殿定家卿ならぬ人の、あて候は、とりて見たくだに、さぶらはざりし物に候、さばかりめでたく候、御所達後鳥羽順徳の一人も入らせおはしませず、その事どなき、院後堀河上を申すばかり、御製とて候事、目もくれたる心地こそ候しか

撰じ出させ給ひて候勅撰（後撰）命いきて見えぬる、それに又後鳥羽院の御孫土御門院の御子にて渡らせおはします院（後鳥羽院）の御覽じ定められ候と承候へば、ちやわんの物に瑠璃をかけて候やうに清く美しく添く仰ぎて、信も起りて覺えて候。
と忌憚なく定家卿の不忠を難詰せられて、蜀葵日に向ふの微意を洩らされたるは六尺の鬚男はづかしき快語ならずや、かくの如くにして、新勅選に對する打撃は、八方より競ひ起り、不快なる、不名譽なる非難相踵ぎ、誹議足らず、罵詈訾出で、嘲笑し、冷笑し、極めて陰險に極めて皮肉に、背に向きて舌を吐きし所以の者は、蓋し時勢を恐れ憚ればなり、定家の子孫たる者、いかでこれを羞耻の限りと、思はざらむ、思は、これ、辯議し、彌縫して、昧よく父祖の失策を糊塗せむとするは、また人情なり、然れども、新勅選は既に公々然たり、今更如何ともすべからず、幸に中院入道より讓與せられし、山莊の障子の歌は、定家卿の自筆にして、まかも人のいまだ知らざる處なれば、得たり賢し、是に附託して、二上皇の御製をさし加へ、定家の本意は即ちかくの如し、とて、私に、百首を、定家卿の選著として、世の攻撃者には、示せるならむ、とより、明月記は、秘藏の家乗にして、人の見るべきにもあらねば、中院入道の選なる事を知らむやうもなく、齊しく欺かれて、さては定家卿の本意は然りけむを心得ざりしこ

そ、くちをし、且は長き業なり、けれど、一時に多數の敵は沈黙して、謀計甘く、其の圖に當りき、爲家卿が、取集めて、作者の名を記して、世に弘めしといふ時に、や、この二歌は、さし加へしならむ、かの二帝は、この道の宗匠におはしませば、他に名歌もあるべきを、わざとがまし、幕府の専横を憤り、あるは皇室の式微を慨み給へる、述懐の御製を並べ、擧げたるも、却りて、怪むべき疑點の一つならずや、かゝる、狡獪手段は、この一流の好みて、弄する處にして、弘長の頃に、龜山上皇の御前にて、古今集の詮義ありし時、爲家卿の子爲兼卿、腰より拔出したる一巻の偽書を以て、祖父の秘傳と號せし例などを知らば、思ひ半に過ぎむ、明月記に、家隆雅經卿を以て終りとせるは、この捏造に關係なき、往時の實録なればなり、これにて、第一第二の不審は、おのづから、氷解せられぬべし。

若し又、明月記の文を、年山紀聞の説に従ひて、釋し、假に、この御製を、蓮生法師の原選と見むか、須らく、蓮生が、人となりを知るべし、蓮生は、もとこれ、幕府の嫌疑を避けむとて、世の勢力をも、打捨て、出家せし人ならずや、三上皇をさへ、流し奉りて、苟も、宮方の遺業は、根を斷ち、葉を枯して、然る後に、満足せむとする際に、當りて、身は、錚々たる關東武士に、まて、しかも、京に住めれば、動もすれば、幕府の耳目を、ひき易き地位に立ちて、何を、か、苦みて、好みて、嫌疑の

抄 長野美波留 燈 富士谷御杖
 梓 弓 木居大平 百首異見 香川景樹
 新 抄 石原正明 峯之機 衣川長秋
 百首證文 本居内遠 百首姿鏡 長野義言
 異見摘評 萩原廣道 新 註 関宮永好
 新 釋 伊能願則 俚言解 佐々木弘綱
 嵯峨之枝折 古川敏休

など、盡く舉ぐるに堪へず、加藤盤齋の抄以上は舊説改觀抄以下は新説と、大やうは判れた
 り、就中、改觀抄うひ學び、異見の三書尤も、有益なり、新抄峯の機の解又善し、一夕話は作者の
 逸話を知るに便ありて、童蒙には殊に興味深かるべし、悉しき事は、一々本書に就きて見む
 ことを要す。

百人一首評釋

金子元臣 柴山啓一郎 合著

天智天皇

天皇は第卅八代の帝にして、舒明帝の御子、御母は皇極帝にまします、御名は天命
 開別尊、御少名は葛城又中大兄と申奉る、近江國大津宮に世を知しめし、中興の
 英主と稱せらる、嘗て筑紫に在りし時、宮を朝倉山に造らせ給ひ、材木劉らず、極
 めて質朴なり、時人黒木御所、また木丸殿といふ、御親ら朝倉や木丸殿の歌あり、
 御陵は山城國宇治郡山科鏡山に在り。

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ

わがころも手は露にぬれつつ

○連夜露に打たれて、
 あはれたる田中の小屋
 に、庵をあらみ、
 の作を見る時は、哀深
 い。

萬葉集に
秋田刈る借廬をつく
り吾居れば衣手寒く露
おきにけるとあるより
脱化せるか。二句庵さ
いふ語を熱めるは、聲
調を踏むむとの樂な
り。
さて、この歌の調を思
ふに、更に上古の風體
に非ず。この天皇の大
御歌ならぬ事もさより
なり。後撰集にまさし
くこの御製として出だ
されたる、いさ覺束な
し。同書はすべてまど
けなき事のみなれば、
信憑し難しと知るべ
し。

○かりほの庵 假庵の庵にて、いの母音の零かりたるなり、萬葉集には借廬と書けり、
秋の田の稻を鳥獸に荒させじとて、守る者の居る番小屋をいふ重詞にて、三日の日、
四日の日などいふたぐひなり○苦をあらみ 苦粗きが故にの義、尋常の屋根には登か
ず、苦を重ねて假にふきたるなり、苦は菅茅を編みて屋を覆ふものなり、をは感歎詞、
みは形容詞の語根に添へて、名詞とするものと異なり、「が故に」といふ意をあらはす
接尾語、俗に「サニ」又「クテ」といふに同じ○ころも手 袖をいふ○ぬれつつ つつ
は動作の連續する時に用ふ、つは半過去の助動詞にて、濡れつ濡れつの意、つつと重
用したるは、餘情をこめて結びしなり○此歌後撰集秋部に「題知らず」、六帖には「借
廬」の歌の中にあり。

○一首の意は、自分が番して居る秋の田のかりいほの、苦屋根の粗さに、自分の袖は其
編目を洩る露に濡れ／＼して、番して居る身は、甚だ難儀なるものなりと、天皇の御身
をおし下し給ひて、民の辛苦をいたはり給ふ御歌なり。

持統天皇

天皇は第四十一代の帝にして、天智帝の御女、御母は蘇我山田石川麻呂大臣女、遠
智娘なり、始め天武帝の皇后にまします、天武帝崩じて、四年正月に即位あり、藤
原宮に世を知しめし給ふ、御陵は大和國高市郡檜隈明日香岡に在り。

はるすぎて夏來にけらしる妙の

ころもほすてふあまの香具山

○初二句、萬葉に類句
多し。まだ／＼と思ひ
し春過ぎて夏來るらし
の意にて、時節の早く
移れるを驚嘆せるな
り。白妙のは枕詞な
ら、猶其の衣の色は大
方白かりしなるべし。
四句 萬葉のは、香具山
の人家に乾せる衣を、
御自身御覽下たる趣に
て、いさ、感深きを、
これはいかゞ。新古今
の撰者違ひ、當時の風
調に適合しめむとて、
わざと直せるにや。
かく四句を改めたるよ

○はるをきて 春も過ぎての意○夏來にけらし 夏が來てまうたらしいにて、らし
は軽く推量する助動詞、俗の「ラシイ」と全じ○まろ妙の 衣の枕詞、白袴の借字に
て、穀の木の皮をもて織りたる布をいふ、其色白ければ衣、袖、雪等の枕詞とし、轉じて
は直に白き事をもいふにいたれり○ほすてふ 乾すといふにて、てふは「トイフ」の略
詞にして、古くはどふ、ちふともいへり、多く歌に用ふ○あまの香具山 大和國十市
郡に在りて、今も香久山村といふ、高市郡藤原宮に近し○此歌萬葉集第一に「藤原宮御
宇天皇御製歌」春過而、夏來其之、白妙能、衣乾有、天之香來山。とあり、新古今集
には「題知らず」とあり。

り、其の響にて、二句
をも來にけらしとは
なるならむ。すべて、
調遣ひ力なき上に、
響ひき、響ひき、
作の御製の妙は、響
べからざるに至れる、
いさくちなし。

○極めて長き意味を、
願ひて、序詞を用
ひて多くの空間を作り
たる手際いと面白。
四句萬葉に永長夜平と
あれば、長きなり夜を
と訓みたるをよしと

○一首の意は、もはや春も過ぎて、夏が來てまきうたらしい、天の香具山に、白妙の夏衣を乾して、里人が夏の用意をするを侍臣等が申すとなり。

柿本人麻呂

人麻呂は孝昭天皇の皇子、天押常日子命の後裔なり、持統、文武の二朝に仕へて、歌詠むことの堪能なりければ、官位高からねども、新田部、高市の諸皇子と交り、又聖駕に従ひて紀伊、伊勢、吉野等に到り、また近江、石見、筑紫諸國に遊び、到る所詠歌あらざるなし、晩年石見に居りて終る、世に歌聖と稱せらる、大和添上郡に其墓あり。

あしひきの山鳥の尾のまだり尾の

ながくし夜を獨りかも寝む

○あしひきの 山の枕詞、山の尾は長く引き延へたる故にいふ、こゝにては山鳥へしひ掛るのみにて、歌の意にはかゝはらず○山鳥 雉に似て尾は猶長し○まだり尾の

す。さるは上句の打重
れたる語法に對して、
節奏の相違へる事を思
ひみるべし。人丸の作
にはあらねど、戀する
人の秋の長夜の遙かに
さるに、神韻を以て勝
れる歌なり。

下垂尾の如くの意にて、すぐれて長き尾を下垂尾といふ、山鳥の尾のまだり尾のとかさねて、長々し夜といはむ序詞としたり、序詞は語勢を強くするために用ふるものにて、枕詞と全づく歌意に關らぬが常なり○ながくし夜 永き夜にて、強くいひたり○獨りかも寝む 獨り寝るのかマアの意、かもは感歎詞なれば、獨り寝むかもとして心得べし○此歌萬葉集十一に「寄物陳思」といふ歌の中にありて、作者未詳なるを、拾遺集戀部に始めて「題知らず」人丸とあり。
○一首の意は、秋のこの長々しい夜を、戀しう思ふ人とふたり寝て明しもせず、獨り寝やう事かマア、さびしきことなりとなり。

山邊 赤人

赤人は人麻呂と並び稱せらるる歌聖なれども、父祖詳ならず、元正、聖武の二朝に仕へたる人なり、聖武帝の神龜年中、天皇の御供して紀國に行き、天平年中には吉野離宮にまゐり、又春日山、辛荷島、敏馬浦及び東國に遊びたることは、其詠歌によりて知る。

○萬葉に、初句田兒之浦（田兒の浦）とあるは、舟より打ち出づるは、舟にて海面に打出づるにやといへる、石原正明の説宜し。これを田兒の浦にの意と見たる説、又、うち出で、田子の浦より見ればと、轉置して聞くべしといへる香川景樹の説もは、皆詭言なり。古來富岳を詠める詩歌中唯一の轉置にして、妙は言舌の外にあり。

田子の浦にうち出でて見れば白妙の

ふじのたかねに雪はふりつつ

○田子の浦、駿河國庵原郡に在り○うち出でて見れば、出でて見ればにて、うちは出づといふ詞を強めむために、添へたる接頭語なり○白妙の、持統天皇の所にいへり、句を隔て、雪につく○ふじのたかね、甲斐、駿河に跨る山なり、たかねは高嶺の畧○雪はふりつつ、つつは例の餘情をこめて結びたる助辭にて、降りつ降りつなり、此句萬葉集には、三の句眞白衣をうけて、ふりけるどあり、然らざれば意義全からず○此歌萬葉集三に「山部宿禰赤人望不盡山作歌一首并短歌」として反歌に田兒之浦從、打出而見者、眞白衣、不盡能高嶺爾、雪者零家留とあるを善とす。新古今集冬部に出現たるは本文の如し。

○一首の意は、田子の浦より海上にうち出でて眺むれば、眞白に富士の山に雪が降つてあるツイ、ア、美しき風景なりと歎稱したるなり。

猿丸太夫

猿丸太夫は其傳詳ならず、されど攝津國菟原郡深草卿の人にして、後、近江曾東山中に隠れし人なりといふ、或は曰ふ聖德太子の孫、弓削王の別名なりと、猿丸は名ならむ、太夫は五位の通稱なり。

おくやまに紅葉ふみわけなく鹿の

こゑさく時ぞあきはかなしき

○おくやまに、奥山にての意、奥山は深山なり○紅葉、もみぢばの略、もみぢは草木の葉の、霜にて赤また黄になるをいふ動詞より、轉じていひ据ゑたる名詞○こゑさく時ぞ、聲を聞く時がことばの意、ぞ文字は、多くの中に一を強く指していふ助辭○あきは秋の中にてはの意○此歌古今集秋部に「是貞の親王の歌合の歌」とありて「詠み人しらず」なり。

○一首の意は、秋となりては何時も哀れを覺えて堪へられぬが、其中にても、奥山に

○上句は、作者の、奥山に紅葉踏分けて、鹿の音聞きたるには非ず。鹿の常あるさまと思ひて、紅葉を踏分けて、さくやうにいへるなり。さて下句は、秋の他の時はさ程にないが、鹿の聲聞く時ぞ悲しきの意なり。この餘意、古より説き隠れるやうに思はる。

て、散り布く紅葉を踏みわけて啼く、鹿の聲を聞く頃がサア、ことに悲しく感ぜらるゝなり。

中納言家持

家持は伴大納言旅人の子なり、天平年中、從五位下に叙せられ、越中守となりてより、諸官を歴任して、天應元年從三位に叙せられ、延暦二年中納言に任ぜらるゝ、同三年征東將軍を兼ね、同四年薨す。歌を善くす、萬葉集はこの人の撰する所なりとす。

かさゝぎの渡せる橋におく志もの

白きを見れば夜ぞふけにける

○鵲橋の本文、何の書に見えたるにや。諸注淮南子に出でたりとするは杜撰なり。又禁中か雲の上といふより、禁庭の御階を天漢の鵲橋に喩へたりといへる説も穩ならず。大和物語に、右大將定國が、

○かさゝぎの渡せる橋、天漢の鵲橋のことなり、其故は七月七日夜烏鵲填河以度、織女とある本文によりていへり、鵲は鳥の名にて、本草に綠背白腹尾翮黑白駁雜とあり、さて、大空の模様のさへ渡りて、天漢の橋上、霜のおくべき氣色の見ゆるより、實際

時平の左大臣を訪ひし時、壬生忠孝隨身にて、鵲のわたせる橋の霜のうへに夜半にふみわけこそさらにこそと詠めりし由見えたるを考へ合すべし。

の橋にとりなしていへるにて、例の唐詩の月落烏啼霜滿、天と同意なり○おく霜俗に降つてあることを、霜にてはあくといふ○白きを見れば、眞白いのを見ればの意○夜ぞふけにける、夜が更けたワイにて、ぞと強くかゝりて、けると結びたるに情こもれり○此歌新古今集各部に「題知らず」とあり。

○一首の意は、天上を見渡せば、さへわたりて、天漢の鵲橋のあたり、霜の眞白にあき満ちたる光景なれば、夜がいたく更けたワイとなり。

安倍仲麻呂

仲麻呂は中務大輔船守の子なり、性聰敏にして讀書を好む、靈龜二年八月年十六、遣唐留學生となりて博識の名あり、王維李白等と友たり、唐に仕へて姓名を朝衡といふ、勝寶中、遣唐使藤原清河唐に到る、仲麻呂與にかへらむとし、海上風に遭ひて安南に漂泊し、復、唐に至り、寶龜元年正月遂に唐に終ふ、年七十、散騎常侍鎮南都護を贈られぬ。承和三年遣唐使に命じて正二位を贈る。

あまの原ふりさけみれば春日なる

○唐詩品彙などに胡衡とあるは、朝の字を誤

れるなり。又、異さも書けり。
仲磨は奈良人なれば、常に都の東なる、三笠山より出づる月を見馴れしまゝに、唐土にありても、月を見渡しては、故郷の三笠の山に出でし月か、つくつくと打詠めたるに、限りなく懐土望郷の餘情籠りて、いと哀なる歌なり。さて、土佐日記のは、海上の記事に取合せむとて、初句を青海原と換へたるのみ。

みかさのやまに出でし月かも

○あまの原、天のことなり、はらは廣き所をさしていふ詞、海原、野原など全じ義に用ふるもの多し○ふりさけ見れば、振放見者にて、さけは放又は離の義、ふりは語勢をつくる接頭語にて、サツと遠くを仰ぎ見る事なり○春日なる、春日にあるの意、春日は大和國添上郡に在り○みかさのやま、春日郷にある山にて、たゞ三笠山ともいひ、又御蓋山とも書く、春日山の麓、春日神社の鎮坐する低き山をいふ説あれど、貝原益軒の説によりて、春日神社の背後なる、俗にいふ春日山の異名とする方よろしからむ○出でし月かも出た月かマアの意、かは疑の助辭、もは感嘆詞○此歌古今集羈旅部に「唐にて月を見てよみける」とあり。土佐日記には、仲麻呂歸朝せむとて、舟に乗るべき所（明州の津か）にて唐人と別るゝ時、月を望みて悵然としてこの歌を詠じ、漢譯してこれ示せるに、衆皆感歎せし由に書き倣して、初句青海原とあり。
○一首の意は、今大空をサツと遠く仰ぎ見やれば、あもしろく月がさし昇るが、あの月はア、わが故郷の奈良に居りし時春日なる三笠山に出た月かマアとなり。

悵然

喜撰法師

喜撰（一に窺仙、基泉に作る）は、その父祖、諸説まち／＼にして定かならず、宇治山に隠棲し、密呪を持す、長生を求め、穀を避け、一夕白雲に乗じて去ると、元亨釋書に「いはるは偽妄ならむ、詠ずる所の歌、唯此一首の外たしかに世に傳らず、六歌仙の一人なり。」

わがいはは都のたつみあかぞ住む

世をうち山とひとはいふなり

○わがいはは 我が庵室はの義、庵とは草木を結びて作れる假の家をいふ○都のたつみ 京の東南の方角なり、子を北として十二支を割當て、右へくれば、辰、巳は東南の間に當るよりいふ、異と書く○あかぞ住む 然ぞ住むにて、此の通りに住み居ると、たしかにいひたるなり○うち山 京より四里許、宇治郡に在り、今喜撰嶽と云ふ、絶頂四五坪眺望宜し、世を愛し幸しといふ意をかけていひたるなり○ひとはいふなり

○結句の人はは初句のわがに對へたるなり。さて、近藤芳樹は或書に人毛とあるを執して、云獨したれど、畢竟するに無用の辯なり。さるは、はにてもにても、いづれにせよ、一向によき歌とは思はれねばなり。

世の人はいふぢやの意○此歌古今集雜部に「題知らず」とあり。

○一首の意は、我が庵室は京の東南の方、宇治山なるが、世の人は賑やかな京近き故、やはり世を憂しとしもいふ、けれども、拙僧はさと思はず、多年久しう、かく住みてありとなり。

小野小町

小町が父祖詳ならず、或はいふ小野良真の女なりと、絶世の容姿ありて、和歌に長じたることは、人口に膾炙する所なり、小野真樹、僧遍照等と詠み交せる歌あれば、文徳天皇の頃盛なりし女なるべし、六歌仙、三十六歌仙に入る。

花の色は移りにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

○花は、一首の仕立に借りたるにて、趣意は、花の色は移りにけりなり。器用に詞華を弄びて、和らきたる處はまさに女流の歌なれど、餘にくだんしく、却りて感情薄き

○花の色は 花によせて自らの姿をいひたるにて、花の如き姿の意なり○移りにけりな うつりは變りゆくことにて、なほ感嘆詞○いたづらに 無益になり、勞して功

やうに覺ゆるは非歟。に文字四つまでもあれど、格別耳立たぬといふが妙なりと稱へおむのみ。

なきことにいふが本なりわ○が身世にふる 世の中に經る意にて、年の寄ることをいふ、又ふるは長雨の縁語○ながめせしまに うつりと志てをる間にの義にて、ながめは長見るの轉、物おもひなり、それに長雨を思はせたり、此句より上へかへりて見るべし○此歌古今集春部「題知らず」とあり。

○一首の意は、何とはなしに、うつとりと我が身の年よることをなげきて、物思ひを志てをる間に、長雨が降って、花の色は最早移ってしまうたナア、と花の移るふによせて、我が容貌の美色の衰ふるを嘆きたるなり。

蟬丸

蟬丸は父祖姓氏共に詳かならず、今昔物語によれば、宇多天皇の皇子式部卿敦實親王の雜色なるが、盲目となりて後に、逢坂山の麓に住みたるに、琵琶に堪能なりければ、源博雅三位は其秘曲を傳はらんとして許されず、私に三年通ひて、はじめて其秘曲を弾くことを傳へられたりといへり、されど、後撰集の詞書に、行かふ人を見てとあるより、盲人ならずといふ説あり。

○香川景樹が、この歌は旅行く人の詠めりしならむ。其處に庵室作りて常に住み居る人のこれやこのとはいふべくもあらざといへる。位田某の説をたすけて、後撰の詞書をいぶかしみ、例のひが業にもやあらむ、蟬丸あるも疑はしといへるは、諸ふべき説に似たり。

これやこの行くも歸るも別れては
知るも知らぬもあふさかの關

○これやこの 此れが彼の云々の關なるかと、結句につけて見るべき句なり、やは疑辭○行くも歸るも 人といふ昧言をはぶける語にて、行く人も歸る人もなり、關を出す人入る人をいふ○わかれては 此句後撰集に、わかれつゝ、とあるをよしとす、例の別れつゝの意なり、句を隔て、逢ふといふ語へつゞく○知るも知らぬも 例の昧言を略せるにて、知る人も知らぬ人もなり○あふさかの關 京都と近江の津との間、滋賀郡に在り、街道に蟬丸祠などあり、昔は關所ありて、街道の峠より東の方に舊趾あり、近江路に出入の旅人を檢したる所、こゝにて過所(關の手形)など改むべければ、自ら人の足もなづみて寄り逢ふ故に、別れつゝ逢ふとつゞけたるなり○此歌後撰集雜部に「相坂の關に庵室を造りて住みけるに、行き交ふ人を見て」とはしがきあり、索性集にも入れり。

○一首の意は、これがあの、京を出でて、田舎へ行く人も、歸る人も、知る人も、知

り。

らぬ人も此所で別れ／＼て、又此所で逢ふといふ名の逢坂の關であるかとなり。

参 議 篁

篁は小野岑守の子なり、嵯峨天皇の語に感じて、始めて學に志し、文章生の試に及第す、世に野相公と稱す、文章は當時に冠絶し、又字に巧に、最も詩に長じ、兼ねて書に巧なり、承和年中、遣唐副使となり、大使藤原常嗣と争ふところありて、病と稱して行かず、遣唐の事を刺り、嵯峨天皇の怒に觸れ、隱岐に竄せらる、路に在りて謫行吟七十韻を作る、數年にして召し還され、後本位に復し、参議に任ぜらる、仁壽二年十二月卒す、年五十一。

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと

人には告げよあまのつりふね

○わたの原 大海のことにて、はらは例の廣き事なり○八十島かけて 多くの島々の方へむけての意、八十は數多きをいふ語にて、必ずしも八十をいふにあらざ、八百萬千

刺り
謫行吟

○勅勅を蒙れる日蔭の身なれば、公然と、都の誰れ彼れに音信せむ事は憚れば、他の人は、さもいづれも、せめて思ふ人だけには告げよといへるなり。人にはの

は文字に心をつくべし。單に人にさいへるさば異なるなや。捨て離き人をまで振捨て、萬里流離の身となり、わづかに、一片の漁舟に託して、その熱情を寄せむとす、感哀窮りなくや。

○天武天皇の吉野の宮に、天女天降りて舞ひ

代八千代等皆全じ○人には告げよ わが家人には告げよの意○あまのつりふね 海人の釣舟ヨと呼びかけたるなり、あまは海人の略にて、海に漁りするものをいふ○此歌古今集羈旅部に「隱岐の國に流されける時に、船に乗りて出立つとて、京なる人のもとに、つかはしける」と詞書あり。

○一首の意は、果て知らぬ大海を、數多ある島々の方へかけて、いま出船したといふ事を、京の家人に知らせてくれよ、あちらへ歸り行く海人の釣舟よと、釣舟の海人に詠へたるなり。

僧正遍照

遍照、俗名は眞岑宗貞といひ、桓武天皇の皇子、安世の子なり、仁明天皇の寵臣なりければ、崩後哀慕已まず、自ら佛に歸す、時人之を慕む、元慶三年十月、權僧正、仁和元年九月、僧正と爲れり、寛平二年正月寂す、年七十四、六歌仙三十六歌仙に列す。

あまつかぜ雲の通ひ路ふきとぢよ

少女のすがたあはしとめむ

○あまつかぜ 天の風の義、つは名詞と名詞とをつなぐ助辭にて、のど全じ、用法古し、天つ神國つ神など多し○雲の通ひ路 雲の中の通路の意○ふきとぢよ 吹きふさげてくれよとなり、よは命令の助辭○少女 若く盛りなる女をいふ、乙女とかくはわろし、こゝにては、五節の舞姫を天女にたぐへていひたるなり、五節の舞は陰曆十一月中の丑の日、豐明節會に臣下に酒宴をたまはる儀式ありて、其時行はるゝ女樂なり。舞姫五人、公卿、國司などより美しき女を、花やかに装束せしめて奉りて、舞はしむるを、臣下に見せ給ふなり、後には大嘗會の時にみ行はる○あはしとめむ 少しの間なりと留めやうの意○此歌古今集雜部に「五節の舞姫を見てよめる」眞岑宗貞とあり。

○一首の意は、そら吹く風よ、天女の歸り上らむとする雲の中の通路を、雲を吹き集めてふさげてくれよ、あの面白い天女の舞ひ姿を、もう少しの間なりども、留めて置きて見やうためにとなり。

しより、五節の舞姫始めておくれりといふ舊説に隨ひ、今の舞姫を、直に天女と見做て、其の舞ひはて、童り入らむとする名殘な情みて、まばしとめむ爲に、雲路を吹閉ちと詠めるは、業平朝臣が、あひなくにまたきも月の體るゝ山のは逃げて入れずもあらむと詠めると、同巧異曲の妙あり。殊に五節の舞姫は、當時の若殿原が、大騒ぎをふたるものなれば、遍照の宗貞も其の一人にて、舞姫の姿に見されて恍惚たるさま、思ひやられ

陽成院

第五十七代の天皇にて、清和天皇の御子、御母は藤原高子、長良の女なり、御名は貞明、元慶元年正月御位に即き給ふ、天皇長じて遊嬉度なし、攝政基經屢々諫むれども、聞かせ給はざりければ、八年二月御位を遷れ玉ふ事となる、後、天曆三年九月崩す、御年八十二、御陵は山城國愛宕郡神樂岡東陵なり。

筑波嶺のみねより落つるみな川

こひぞつもりて淵となりぬる

○おのれ、先づ年筑波山に上りて、目のあたり、所謂、みな川を見たりき。山の高根より眞砂の下をくゞりて、川とも見えす、一滴づゝ流れて、末は遠に川となるこそ、此大御歌の趣によく適へり。されば、みな川は水無の川の義なるべし。さはいへ、峯より落

○筑波嶺のみね　ねはみねと全じ、山の頂をいふ、つくばねといふが名なる故、峰と續けたるなり、常陸國にあり○みな川　みな川の如くにの意、筑波山中に在り、末は櫻川に合す○こひぞつもりて　戀しいの念がつもりての意○淵となりぬる　深き思となつたの意、ふちは水の隈みて深き所をいふにて、思ひの深くなるをよそへていへり○此歌後撰集戀部に「釣殿の皇女に遣しける」とはしがきあり。

つる水さいふに、みな川のみなをいひけたりさまで解するは穿鑿に過ぎたりむ。

○一首の意は、筑波山の峰から落つるみな川の水が、つもりくゞて淵となる如くに、我が戀は、たゞ假初の思ひなりしが、月日の立つにつれて、深き思ひとなりたりとなり。

河原左大臣

源融公は嵯峨帝の皇子にして、仁明帝に養はる、承和五年禁中に加冠し、正四位下に叙せらる、六年、侍從となり、屢々昇任して、從二位左大臣に至り、元慶元年、正二位に進む、寛平七年八月薨す、年七十四、河原院を東六條に營みて居り、臺閣、水石巧に華麗を極め、陸奥鹽竈の浦の勝を模したるよりして、河原院左大臣と稱せらる。

みちのくの志のぶもぢずりたれ故に

亂れそめにしわれならなくに

○志のぶもぢぢの事は、古來諸説まち／＼にして、俄に定め難く、姑く下文のまゝに従ひおこむ。

○みちのく　陸奥の國をいふ、道のおくの志の署りたるなり○志のぶもぢずり　志の

めにしとあるを、こゝには采りたるにて、古今集の亂れむと思ふとあるには劣りざまなれど、猶さうに面白し。調の高古なる、意調の婉曲なる、戀の歌としては、まさに上乗の部ならむ。

ぶずりともいふ、古へ布帛に忍草の莖葉を、種々の色に摺りたるものにて、其文亂髪（ハナミツ）の如く振れるさまなれば、振摺ともいふ、陸奥の郡名の信夫にかけていへるなり、こゝまでは亂れの序にいへり○たれ故に 誰のためににて、君ゆゑにの意を含ませたり○亂れそめにし 亂れ初めたの意、此句古今集には、亂れむと思ふとあり○我れならなくに 我れにあらぬにの義、なくは打消のぬの延にて、なくにといひさしたるは、餘情をこめたるなり○此歌古今集戀部に「題まらず」とあり

○一首の意は、他の人ゆゑに心の亂れそめしにはあらず、君故なればこそ、かやうに亂れそめし我なるものを、つれなきことよとなり。

光孝天皇

第五十八代の天皇にて、御名は時康、仁明天皇の御子、御母は藤原順子なり、陽成天皇御位を遷れたまふに當り、基經等迎へ奉る、元慶八年二月即位、在位三年にして仁和三年八月崩す、御年五十八、御陵は山城國葛野郡後田邑に在り、小松の帝と申す。

君がため春の野にいでて若菜つむ

わがころも手に雪はふりつつ

○君がため 君に贈らむがための意○若菜つむ 若菜を摘むの意○わがころも手に我が袖になり○雪はふりつつ 雪は降りつゝの意にて、餘情を籠めて結びたるなり○此歌古今集春部に「仁和の帝、皇子におはしましける時に、人に若菜給ひける御歌」とあり。

○一首の意は、君に贈らむ爲にとて、春の野邊に出でて若菜を摘む、この我が袖に、雪は降りつゝして、寒うて甚だ難儀なりとなり。

中納言行平

行平は平城天皇の皇子、彈正尹四品阿保親王の子にて、業平の兄なり、天長三年在原朝臣の姓を賜ふ、仁明天皇の御時、正五位、齋衡二年從四位下因幡守となり、陽成天皇元慶六年、中納言兼民部卿に至る、寛平五年薨す、年七十六、獎學院を左京

○本下幸文がいはい、野邊にて聞こちて詠み給へる歌と聞ゆ。されど、人の爲に親王の御身として、雪降る野邊に出でて、御手づから摘み給へるには非ず。人に若菜給へる日じも、雪の降りけるによりて、わが袖は詠みなし給へるならむといへり。この説いさ宜し。わが衣手にあるは、ちらりちらりと降りける泡雪の風情なるべし。その百首中の天皇の御製にては、最も勝れたる御歌にや。

三條に創す、行平又書を能くせり。

たち別れいなばの山の峯におふる

まつとしきかば今かへりこむ

○去ぬさ歸るをな詞は
せ、又、いひかけの詞を
一首の内に二所も用ひ
たるは、この朝臣の歌
風なり。すべて、親句
の續きたるは、いし
らぬものなるを、四五
の句の續き、粗句に任
立てたれば、これに見
直されて宜しくなり
ぬ。今の一語も言くお
かれたり。

○いなばの山 因幡國法美郡に在り、稻葉山とも書き、又宇倍山と云ふ、山下國府村は、行平が國守たりし時、官邸をかまへたる地なり、立ち別れて往ぬるの意に因幡をいひかけたり○峰に生ふる 頂上にはえてあるなり○まつとしきかば 待ちて居ると、聞くならばの意、松に待つをいひかけたるにて、しは強め詞なり○今 俗にデキニの義○此歌古今集離別部に「題まらず」とあり、行平因幡守となりて下る時のなるべし。

○一首の意は、我は汝と別れて、因幡の國へ往くが、其國のいなば山に生えて居る松の名の如く、汝が我を待つと聞くなら、すぐにかへりて來うとなり。

在原業平朝臣

業平は行平の弟にして、母は桓武天皇の女、伊登内親王なり、世に在五中將と稱す、容姿閑麗、善く和歌を作り、又書に巧なり、貞觀年中左近衛權中將となり、元慶年中、藏人頭に補し、相模、美濃權守を兼ね、四年五月卒す、年五十六、六歌仙、三十六歌仙の一人なり。

ちはやぶる神代もきかずたつ田川

からくれなゐに水くくるとは

○いにしへ千早ぶる神
さも人さも續けたる
は、昔其の暴威を形容
せるなれば、正しき神
の枕詞には玉ちばふさ
いふ詞の方を用ふるが
よしとの説もあれど、
今はそれらの別ちなく
なりたれば、故更に區
別するにも及ばず。
この歌題の歌なれば、
實景實物を願みず
してよめり。青くつき
流したる水の上に、
其だ不釣合に大きな

○ちはやぶる 逸速ぶるの約にて、ぶるは其形容をいふ詞なり。強き勢の縁により、

神又人の枕詞とし、轉じて金、加茂等にもかけ、物部を氏人といひて、其勇威のいちはやきより、うちの枕詞ともす○神代も 神代にもなり、神武天皇の御治世以前をいふ○たつ田川 所在につきて異説あれど、大和國平群郡に在る、今の龍田川をいふ説よろし○からくれなゐ 韓國より傳りし、くれなゐにて、染色の好きにつけていふ、後にはひろく唐衣などやうに、珍らしきをたたへて、カラなにといふやうになれり、今の世舶來と云ひてめづるが如し、くれなゐは吳の藍にて、染めかた、藍の如き

紅葉の、まかも遺き紅なるを浮べたれば、恰も綾り染のやうに見ゆるなり。昔繪の不器用なるさま思ひやるべし。

より名けし語○水くくるとは 水をくくりぞめにするとはマアの意にて、とはにて止めたるは、想外の情こもれり、くくるは絞染をなすことなり、紅麁子絞の如きは縹縹なり○此歌古今集秋部に「二條の後の東宮の御息所と申しける時に、御屏風に立田川に紅葉流れたる書かけりけるを、題にてよめる」とあり。

○一首の意は、神代にはいろ／＼とふしきな事があつたれど、立田川の水を紅のくくりぞめにするに云ふは、聞かぬことデヤ。この書の紅葉のむら／＼流るゝ所は、マルデ紅の絞であるを嘆賞したるなり。

藤原敏行朝臣

敏行は藤原不比等の孫、富士麻呂の子なり、延喜年中、從四位上右兵衛督に至る、卒する時年僅に二十七、書を能くし、歌に巧なり、村上天皇嘗て小野道風に、古今妙書の最なるものを問ふ、道風、僧空海、敏行を以て對ふといふ、三十六歌仙に列す。

すみの江の岸による浪よるさへや

「る浪のよるを浪の字か隔てゝ、疊みたるに

ゆめのかよひ路人めよくらむ

て、次に「泉川。いつみきさてか」小野の篠原まのぶれごなど、みなおなト詞の巧を以て、聲調を踏へ、意義を強めたるなり。又、何故といふ詞を三句の下に含めて解くべし。うつしに思ふ心ならひの、そのまゝ夢にも見えしを、目覺めたる際に、情なく思ひて詠めるなり。

○すみの江 攝津國住吉郡にあり、今住吉といふ○岸による浪 岸にうち寄る浪にて、こゝまでは下の句の、よるといふは序詞なり○よるさへや 寄る事を夜にいひかけたるなり、さへはそへの轉にて、一つある上に、又一つ加はる意の助辭にて、晝ばかりか、夜までも義となる、やは感歎の意をこめて、らむの結びの係りとなる○ゆめのかよひ路 女の許へ行くと見る夜の夢の中の通ひ道なり○人め 他人の見る目をいふ○よくらむ 避くらむにて、らむは推量の意の助動詞○此歌古今集戀部に「寛平の御時、后宮の歌合の歌」とあり。

○一首の意は、晝の中に、誠に女の許に通ふ道ならばともかく、何故、夜、夢に通ふにまで、人目を避くるならむと、歎きたるなり。

伊勢

伊勢は從五位上伊勢守藤原繼隆の女なり、されば七條后の宮人たりし時、伊勢をもて呼名とせられしなるべし、後に宇多天皇の皇子を生み奉りし故、尊びて伊勢の御

息所ども、伊勢の御ともいへり、和歌に工にして、三十六歌仙の一人なり。

なには渦みじかき蘆のふしの間も

逢はでこのよを過ぐしてよとや

○木下幸文の説に、か
トかきはふしに
詞にて、葦の短き節を
續くべきか、詞につき
てかへせるなりといへ
るは、さもと疑ゆ。
縁語の修飾をよるこぶ
は、このおもとの癖な
り。つれなき人を恨み
たる心いと切に深し。

○なには渦^{うず} 攝津國難波海なり、渦とは遠淺にて海水の干満により、海ども地どもな
る所をいふ○みじかき蘆^{あし}の 蘆はよしともいふ草の名、こゝまでは甚だ短きことをい
はむためなり○ふしの間も いさゝかの間もの義、あしの節の間は短きものなればい
へり○逢はで 逢はずしての約語○このよを 此の世の中をの意、節と節との間をよ
どいへれば、蘆の縁語にていへり○過ぐしてよとや 過ぐせといふ事かなり、てよは過
去の命令をあらはす助動詞、どは上を承けて下につくくる助辭、やは疑の助辭なり、
かくいひさして餘情を籠めたり○此歌新古今集戀部に「題まらず」とあり、家集にも
題なし。

○一首の意は、ハノノいさゝかの間も、逢はずして、此世を暮らせよといふ事か、ソ
リヤアンマリのお心なり、たとへ少しの間でも、逢はずにくらす事は堪へ難きにとな

り。

元良親王

元良親王は第五十七代陽成帝の第一の皇子、御母は藤原氏、主殿頭遠長の女なり、
天慶六年七月廿六日、三品兵部卿にて薨せらる。御年五十四。

わびぬれば今はたおなじ難波なる

みをつくしても逢はむと思ふ

○この親王は有名な流
色家におはすれば、か
ゝる自暴自棄の怪戻の
詞をも出だされしに
や。思ひ入りたる戀の
情とはいへ、聞くも厭
はしき心地す。舊き抄
に、幽玄體の歌と見え
たれど、何の幽玄なる
事ありむ。

○わびぬれば 思ひむづらひて居りてはの意、即ち戀人と逢はれぬ爲に心を苦しめて
なり○今はたおなじ 今はやはり同じの義、はたは又と同じき副詞にて、意や急な
る語、俗のやはりに當る○難波なる 難波にあるにて、みをつくしといはむ序なり○
みをつくしても 身をなくなしでもなり、みをつくしは、湊つ申にて遠淺の海のみ
を、即ち水派の深みを示さむために、あるしに立てたる杭なり、それを身を盡くしに
いひかけたり○逢はむと思ふ 逢はうと思ふなり、そ文字によりて、其切なる思ひ

を見るべし○此歌後撰集戀部に「事いできて後に、京極の御息所に遣されける」とあり、拾遺集には「題知らず」なり。

○一首の意は、密事の露れたる遠慮に、逢はずして、かく思ひわづらひて苦みをすれば、逢ひて憂き目を見るも、今はやはり同じ事よ、イッソ命を亡くしても、御身に逢はむとサア思ふとなり。

素性法師

素性は僧正遍昭、在俗にて良岑宗貞といへりし時の子にて、初の名は亥利といへり、清和天皇に仕へて、右近衛將監となる、僧となり雲林院に住して、權律師に任ぜらる、又石上良因院に住せり、三十六歌仙に列す。

今來むといひしはかりになが月の

ありあけの月を待ち出でつるかな

○時もあらむに、夜の最も長月の、最も速く出づる頃の有明の月を待出だしたるに、いふに、待ち出でつる由を思ふ。

○今來むと 俗にデキニ來うといふに當る○いひしばかりに 言つた程になり、ばか

は、いふに、婉曲にして、あつたに、めでたき歌なり。

りは俗に程の義○なが月の なが月とは猶熱月の略とも、夜長月の意ともいふ、舊九月の異稱なり○ありあけの月を 舊十六日以後の月の事なれど、こゝには二十日以後の月の事なるべし、夜更けて出でて、空に在りながら夜の明くるより、有明といふなり○待ち出でつるかな 待ちて月が出たツイナアの意、戀人を待ちをるを、月を待つによそへたり○此歌古今集戀部に「題知らず」とあり。

○一首の意は、暮れなばすぐに行かうといひしほどに、今や來るか／＼と待つうちに、思ひもよらぬ有明の月を待ちえて、月は出たが、約束の人は來ぬかナアと嘆きたるなり。

文屋康秀

康秀、字は文琳、父祖は詳ならず、されども姓氏錄によれば、文武天皇の皇子、二品長親王の後裔なりといふ、貞觀、元慶の間中判事より、山城大掾、三河大掾、縫殿助など歴たりし事見えたり、子朝康亦和歌に名あり、此歌或は朝康のならむと、僧契沖はいへり、六歌仙、中古三十六歌仙に列す。

○古今六帖には朝康の歌として、二句なべて草木のさあり。菅家萬葉には初句を打吹くに、結句を嵐てふらむさあり。

公任が和歌九品といふものに、この歌を下品の上におきて、わづかに一ふしあるなりと評せるは、さる事なりかし。

吹くからに秋の草木の志をるれば

うべ山風をあらしといふらむ

○吹くからに 吹くとそのまゝの意、からは「に因りて」の意をあらはす接尾語○志を
るれば 草木の潤み枯るゝをいふ○うべ うべなふ意の副詞にて、俗の成るほどに當
る○あらしといふらむ 嵐を物を荒すにひひかけて、山嵐をあらしといふのだらうと
推量したるなり○此歌古今集秋部に「是貞親王の家の歌合の歌」とあり

○一首の意は、山風が吹くと其まゝ、秋の草木の萎れてしまふのを見れば、成るほど山の風をあらしといふのであらうかとなり。

大江千里

千里は參議音人の子なり、或曰、玉淵の子にして、音人の孫なりと、天慶七年備中權大掾たり、延喜元年中務丞に任じ、全三年兵部大丞たり、中古三十六歌仙の一人なり。

月見ればちぢにものこそ悲しけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど

○氏文集に
燕子樓中明月夜、秋
來唯爲一人長。さある
を下に思ひて詠める由
諸註にいへり。この作
者儒士なれば、さる事
ありぬべし。四句わ
身ひさりさといはむな
さつとさひひかへて、上
のちに對へたる、活き
な味ふべし。大方感あ
りて聞ゆ。

○ちちに　さま／＼にの意、ちちは千箇チカにて、一箇ヒツツ、二箇フタツツのつ、二十箇ニダツのち、皆全じ
○ものこそ悲しけれ　物事が悲しく感ずるの意、こそは例の強いひたり○わが身ひと
どのの　我が一身だけのなり○秋にはあらねど　秋ではないけれどにて、餘情を籠め
ていひさしたり、ねは打消の助動詞なり、此歌は四、五、一、二、三とかへして見るべし○
此歌古今集秋部に「是貞の皇子の家の歌合によめる」とあり。
○一首の意は、月を見れば、さま／＼と、物事が悲しくあるツイ、我が身一つに限り
たる秋ではないけれども、とりわけて我は悲しく思はるとなり。

○一首の意は、月を見れば、さまざま、物事が悲しくあるツイ、我が身一つに限りたる秋ではないけれども、とりわけて我は悲しく思はるゝなり。

營家

菅家は菅原道真公をいへるなり、公は參議是善卿の子なり、儒生より起りて、昌泰二年終に從二位右大臣となる、藤原時平等の讒によりて、全四年大宰權帥に貶せら

る、延喜三年二月二十五日配所に薨ず、年五十九、延長元年、本官を復し、正二位を贈られ、一條帝の正暦四年、正一位太政大臣を贈らる、天曆年中、民間北野に祭りて、天満天神といふ。

このたびは幣もとりあへず手向山

もみぢのにしき神のまにまに

○景樹が、何時はあれど、此たびは、数ならねわが幣などは、え手向けもあへず、折から山は紅葉の錦幾すむら織りかけて、神の御心のまゝなればさ、いふ意なり、と解けるは、下文の解さば異なれど、また面白し。さて、紅葉を錦と見立てたるは、幣にすべき料の布帛に、いふあればなり。

○このたびは 今度の旅はにて、此度に、この旅をいひかけたり○幣 御幣のことなり、麻、木綿、帛、紙など、神に祈る時に、切りて捧ぐる物○とりあへず 用意もせずの義なれど、急がはしくて、用意せられずの意を籠む○手向山 大和國奈良町大字雜司に在り、手向神社あり、櫻の老樹多し、神への手向けに、山の名をかけていへり○もみぢのにしき 紅葉にてなれる錦の意○神のまにまに 神の御心任せにといひさして、餘情をこむ、まにまには儘にの略語にて、隨意の義なり○此歌古今集羈旅部に「朱雀院^{寛平}の奈良におはしける時に手向山にてよめる」とあり。

○一首の意は、今度の旅行は天皇の御供にて、手向の幣の用意せざりし故、此手向山の紅葉が、さながら錦のやうなれば、これを幣として、神の御心任せに、其まゝ手向まするとなり。

三條右大臣

三條右大臣は藤原定方公にて、父は内大臣高藤なり、延長二年正月大納言より、從二位右大臣に昇任す、承平二年八月薨す、年六十、從一位を贈らる、歌を善くして多く撰集に入れり。

名にしおはば逢阪山のさねかつら

人に知られでくるよしもがな

○清水漬臣の説に、くるとは往くなり、古歌に例甚だ多しといへり。さてはわが往くよしもがなの意にて、女の来るには非ず。いづれなよしとせむか。又、逢阪山のされ葛を、何のいしめて、この歌に取入

○名にしおはば 名にし負ふにて、しは強めの助辭、即ち名を負うて居る通りならばの意○逢阪山 ^{アサギヤマ} 近江國と山城國との境にある山にて、前にいへる逢阪山の關のある所、逢ふの名を負へり○さねかつら 俗に美男葛といふ、又五味子の稱あり、蔓草なれ

わいて名にしおはせ
へる、定かならず

は、句を隔て、くるよしもの、くるにかけていへり、さねは小寝にて、さは發語、ねはねるといふことにて、男女相寝ぬる名を、負ふをいへるなり○人に知られで、他人に知られないでにて、ではずしての略語○くるよしものがな、来るすべもあればよいがナアの意、くるは女の来るに、葛を手繰るをかけていへり、がなは希ふ意のがといふ助辭に、なの感動詞を添へたるにて、希望の感動詞なり○此歌後撰集戀部に「女のもとへ遣しける」とあり。

○一首の意は、逢阪山にあるさねかつらの、逢ふといひ、小寝といふ名を負うて居る通りならば、人に知られずして、思ふ女の、我が許へ来るやうにして、寝むすべもあればよいがナアとなり。

貞 信 公

貞信公は藤原忠平の謚なり、父は太政大臣基經にて、時平の弟なり、延喜年中、左近衛大將從三位大納言に至り、十四年右大臣となり、承平六年遂に太政大臣に昇り、天曆三年八月薨す、年七十、初め兄時平、延喜格式を撰する、未だ成らずして薨

ず、忠平踵ぎてこれを成し、格十二卷、式五十卷を上る。

小倉山峯のもみぢばこゝろあらば

いま一たびのみゆき待たなむ

○一、意到底に詠み下され、奇巧な弄ばざる所に、な、一、味あり。居中國梅の臣、まさに、かくの如きの詠なかるべからず。

○小倉山 山城國葛野郡嵯峨の大井河の邊に在り、楓樹多きを以て聞ゆ○峰のもみぢ

ば 峯の紅葉ばよと呼びかけたるなり○こゝろあらば 思ひやりがあらばの義、俗に情愛があらばといふとなり○いま一たびのみゆき モウ一回の御出ましの義、みゆきは、天子には行幸、上皇には御幸とかけども國語にては同じ事なり○待たなむ なむは願の意を顯す助動詞なれば、こゝは待ちてくれ、ばよいの義○此歌拾遺集雜部秋に「亭子院上皇 大井河に御幸ありて、行幸(醍醐天皇の)もありぬべき所なりと仰せ給ふに、事の由奏せむと申して」とあり

○一首の意は、小倉山の紅葉ばよ、今宇多上皇の御幸ありて、行幸もありぬべき所なりと、御賞美あらせられたれば、此由奏上せば、今上天皇にも御覽に御出ましになるであらうが、思ひやりがあるならば、もう一回のみゆきを散らずに、待ちてくれよか

しどなり。

中納言兼輔

兼輔は藤原利基の子にて、冬嗣の曾孫なり、延喜廿一年參議、延長五年從三位中納言となり、全八年右衛門督を兼ね、正平三年二月薨す、年五十七、和歌を善くす、世に堤中納言と稱す、三十六歌仙に列す。

みかの原湧きてなぐるゝいづみ川

いつみきとてか戀しかるらむ

○この歌の作者につき、契沖師の委しき説あり。げに六帖の讀人不知の歌なるを、新古今には、兼輔の作と見誤りて出せるなるべし。

○みかの原 山城國相樂郡にて、今の瓶原村なり、古は三日原、三香原、瓊原、御香原等に作れり、この句の下にに文字を含めて聞くべし。○湧きてなぐるゝ 涌き出して流るゝなり、湧くは地中より吹き出すこと。○いづみ川 瓶原と全所、こゝまでは、いつみきと重ねいはむ序なり。○いつみきとてか いつみきは何時見きに、いつ見たとていうてかなり。○戀しかるらむ 戀しいのだらうの義なり。○此歌新古今集戀部に「題え

に告めたるを面白きなり。川の名の泉をいひいで、むさて、涌きて流るゝといへるも關おもしろし。

らずしどあり。

○一首の意は、見しことがあらば、心にのこりて、戀しく思ふ事もあらむが、何時見たとていうてか、かくは戀しいのだらう、いぶかしどなり。

源宗干朝臣

宗干朝臣は光孝天皇の皇孫、一品式部卿是忠親王の子なり、寛平六年從四位下に叙し、八年丹波權守に任じ、承平三年右京太夫に任じ、天慶二年正四位下に至り、全年卒す、三十六歌仙に入る。

やま里は冬ぞさびしとまさりける

人めも草もかれぬとおもへば

○春秋の交は花も紅葉もありて、都人の音づるゝもある故に、寂しき中にも、少しは賑ふところもあらむを、冬さなりての山家は、げに寂しかるべし。草もさいへば、弘く草木に亘るべしといへる契沖

○やま里 山家のことなり。○冬ぞ 強く冬をさす。○人めも草も 人の見る目も草もの意。○かれぬとおもへば 人も來なくなり、草も枯れて去まふと思へばの意にて、下の句を上句の上へつけて見るべきなり、例のいひさして餘情をこめたり、かれは人目

の説宜し。さて、草の枯るゝは、いづこにもありぬべけれども、人目のかるゝは山里に限る事なり。故に重きば、人目の方において、草は添へていへるなり。

の方にては離るる意にて、草の枯るるをいひかけたり、ぬは半過去の助動詞○此歌古今集冬部に「冬の歌とてよめる」とあり。

○一首の意は、山里は何時も寂しけれど、とりわけて冬は寂しさが増るワイ、人も遠ざかりて来なくなり、草も枯れてまふと思へばマアとなり。

凡河内躬恒

凡河内躬恒は天津彦根命の後なりといふ、寛平中、甲斐少目となる、醍醐天皇に召されて、御書所に候す、延喜中、丹波權目、淡路權様を歴て、和泉大塚に遷り、六位を授けられ、古今和歌集の撰者となる、三十六歌仙に列す。

こゝろあてに折らばや折らむ初霜の

置きまどはせるゐら菊のはな

○こゝろあてに推し量りにの義○折らばや折らむ 折らば折られやうかななり、やは疑の助辭○初霜の置きまどはせる 初霜が置きて、菊の白花と混らはしく見するな

○初霜ならむには、さのみ繁かるべからざるを、白菊の花を置きまどはして、あてに折らむまでいへる、餘りなる虚言なりさて、難する人あれど、

よく思はざる論なり。

これは、山ある白菊を、初霜の雪ける朝、こなたより見渡して、詠めるなり。されば、いゝその言葉の霜を見で、彼方の菊の白さを、霜故にやと思ひ感へるより、初霜のおき感にせるさといへるならす。さて、いゝ思ひ感ふは、餘り霜のやうに見馴れぬ、初霜の朝に限るなり。

壬生忠岑

り、初霜は最も早く降る霜をいふ○此歌古今集秋部に「白菊の花をよめる」とあり。
○一首の意は、初霜が真白に草葉の上に置きて、白菊の花と見まがはせる故に、何れが花か霜か見分けがつかねど、大概あて推量に、折らば折られやうかマア、菊の花の白い事はとなり。

忠岑は從五位下安綱の子なり、初め右近衛大將藤原定國の隨身たり、醍醐の朝、御書所に候し、左近衛番長、右衛門府生、御厨子所預、攝津大目等に歴任し、六位を授けらる、歌を善くし、古今集撰者の一人なり、嘗て和歌十體を撰べり、三十六歌仙の一人なり。

有明のつれなく見えしわかれより

あかつきばかり憂き物はなし

○有明の 有明の月の如くの意、有明の月のことは前に委しくいへり○つれなくつ

○この歌實に解しにくき歌にて、古來諸説まち／＼なり。畢竟、つれなくの不完全なる故ならむ。さるを、古今集戀歌中の名歌を申せ

その後鳥羽天皇の勅諭
を承りて、定家院の
兩廂共に、この歌を書
きて上りし物に見え
たるはいふよし。

れもなしと全句詞にて、無情、強顔などいふにあたり、月の夜明けても光残れるを、
剛情の意にて、つれなしといふに、人の我が心を何とも思ひくれぬといふ意をかけた
り。○わかれより 別れし時からの意、よりはからと同語にて、二つの間に移る意をい
ふ助辭。○あかつきは程の義。○憂き物はなし づらきものは外になしの意。○此歌古今集戀
部に「題知らず」とあり。

○一首の意は、かつて思ふ人の許に通ひたりしに、曉になりたれば、有明の月の、つ
れなく残れる如くに、人がつれなきさまに見えしを見ながら、心ならずも、別れてか
へりしことがありてから此方は、曉ほど、つらいものはなしと思ふとなり。

坂上是則

是則は坂上田村麻呂の後なり、父祖詳ならざれども、或は好蔭の子なりといふ、御
書所衆より大内記となり、延長二年從五位下加賀介となれり、和歌をよくし、古今
集に入る、三十六歌仙に列す。

あさぼらけ有明の月と見るまでに

よし野の里に降れるまらゆき

○あさぼらけ 朝朝明の略にて、夜明けがたの事なり。○有明の月と見るまでに 有明
の月のてらす影かど見る位になり、までには俗にクラキニ當る。○よし野の里 大和
國吉野郡にあり。○降れるまらゆき この句の下になる哉といふ詞を含めり、降れるは
降りてあるの約言。○此歌古今集冬部に「大和國にまかれりける時に、雪の降りけるを
見て詠める」とあり。

○一首の意は、朝ほの、明けに見れば、恰も有明の月の影かど見ゆるほどに、吉野
の里に降つたる雪チャナアとなり。

春道列樹

列樹は、新名宿禰の子にして、延喜二十年壹岐守に任ぜらる、時に文章生たりしとい
り、古今集中作者の一人なり。

○夜明け方闇の戸引き
明くれば、外の方の白
きに、まだしき程なれ
ば、一度は有明の月影
の地に印したるかと思
ひしが、よく見れば、夜
の間に降れる雪の光な
りしなり。吉野は山ふ
ところにて、餘所よりは
雪の早き程見え、又、
月影に紛ふばかりの薄
雪のおしなべて、降り
まけるさまと思ひやら
れて、意も調も優れて
高くなつかしき歌な
り。

○既に、山川の瀾々の落葉を櫓に見立てたるを、又、風のつけたるを、擬人法もていへるは、巧中に巧を求めたるものなり。木の葉なりけりといはで紅葉ともしいへるは、川水に對せる色彩の配合を思へるなり。

山がはに風のかけたる志がらみは

流れもあへぬもみぢなりけり

○山がは 山の間を流るる河をいふ○かけたる志がらみ 拵へたる櫓にて、櫓は流水の勢を塞がむために、杭を連ね立て、横に竹柴などを櫓みつけたるをいふ○流れもあへぬ 流れおはせぬの意、もは汎く感情に發する詞にて、俗のマアと全む○もみぢなりけり 紅葉であつたワイにて、けりは過去の助動詞にて、こゝには感情を多くいへり

○此歌古今集秋部に「志賀の山越にてよめる」ぞあり。

○一首の意は、山川に風の拵へたる櫓といふは、外でもない、瀾の處々に流れもマアおはせずして水を堰いてゐる落葉であつたワイとなり。

紀友則

友則は有友の子にして、貫之の從弟なり、宮内權少祿より土佐祿となる、昌泰初年少内記に叙せられ、延喜に至り、大内記に轉じ、六位を授けらる、古今集撰者のうち

に列し、三十六歌仙の一人なり。

ひさかたの光のどけきはるの日に

あづごころなく花の散るらむ

○調緩やかに、委のびいとして、春の日の長閑なる景氣を甘く描寫せり。初句に枕詞を置きたるも、調をのぞめむとの葉なり。又、三句の下に、何故にといふ意の詞を補ひて聞くべき由諸註にいへれど、其のこれを略きたる理由を言はず。これは、何故なごやうの難詰の意味ある詞を用ふ時は、調急迫して、平和なる一首の仕立を害すはなり。花ののの文字も、大に調を緩和したり。

○ひさかたの

もと天の枕詞にて、日差方の義より出でたりども、或は久堅、日離

方、堯方の義なりなど説多し、轉じて雨、月、星、雲など、すべて天象の物の枕詞にも用

ふ、又日の光、月の都にも用ひ、略して、光、都にも用ふるなり、こゝにては光にかゝ

れる枕詞○光のどけきはるの日に 日のユツタリとして麗しき春の日なるになり、の

どけきは和氣しの轉語、六帖に、この句、光さやけきとあるはわろし○あづごころなく

靜心なきにて、氣ぜはしく、そはくする意○花の散るらむ のはがど全じき義の助

辭、らむは推量の助動詞にて、櫻の花が散るだらうの意なり、歌には花どだにいへば、

多く櫻のことをいふ習ひなり○此歌古今集春部に「櫻の花の散るをよめる」ぞあり。

○一首の意は、大空の日の光のゆつたりとしてをる春の日なるに、何故に花は、かく

心ぜはしく散るであらうとなり。

藤原興風

興風は道成の子にして、院藤太と號す、延喜十四年、下總權大掾より、相模守從五位下に進む、歌を善くし撰集に入る、三十六歌仙に列す。

誰れをかも知るひとにせむ高砂の

まつもむかしの友ならなくに

○上句を下句に、こゝに「わたりたる歌なり。松の春をいひて、故舊の無を嘆ずる中に、人は昔當世の今めかしき方にのみ走ら折節なれば、老人なごの心知りは有難し趣を含めて、誰をかしと思ひ過せるや、哀いと深きなり。」

○たれをかも かは疑の助辭、もは感歎の意をあらはす詞にて、誰をかマアの意なり○知るひとにせむ 知人とせむにて、朋友とせうなり○高砂のまつも あの山の松でさへもの意、高砂はもと播磨の地名にて、近傍、尾上といふ所ありて、有名の場所ゆゑ、常に高砂の尾上とつらねて呼ぶよりして、轉じて遂によのつねの山の尾の上に掛けて、歌などに詠じ、轉じて唯山といふ意に用ふるに至れり○むかしの友ならなく 昔なじみでないのにの意にて、なくは打消の助動詞ぬの延言○此歌古今集雜部に「題知らず」とあり。

○一首の意は、誰をマア心知りの友として交をせう、己れは甚だ年老いて、昔馴染の人は、一人も生き残りて居らぬ、あの向ふの山の松も年久しい物なれど、元より非情の物とて、昔の馴染でもないうにすぎなり。

紀貫之

貫之は藏人望行の子なり、延喜中、御書所預となり、越前權少掾、少内記等を歴、大内記に轉じ、從五位下加賀美濃介となり、延長中、土佐守となり、天慶に至り、玄蕃頭、從五位上、木工權頭、從四位下に叙せられ、九年卒す、古今集撰者の隨一たり、有名の土佐日記は、土佐の任滿ちて、歸京のときの日記なり、歌を善くし、後人歌仙と稱し、柿本人麿に配して、和歌の祖宗となす、又書を善くす、三十六歌仙に列す。

ひとはいさ心も知らずふることは

花ぞむかしの香にほひける

○貫之が久し振に來りて、これまで疎遠なりしを、宿の主人の恨みて、否味ないひて出迎

もせぬを、然る者の責
之なれば、主人はいた
く餘所／＼しくせらる
ゝが、馴染甲斐に、梅
の花は昔の香に匂ひけ
り。さては、主人よりは
梅の花の方が、かく御
尋れ申す拙者と同トや
うに、親切に存せらる
る、當／＼すりたる餘
意を聞知るべきなり。
應酬の歌まさにかくの
如くならざるべから
ず。巧語言なるかな。

○ひとはいさ 主人はどうであらうかの意、梅の花の主人をさせり、いさは如何なら
むにて、俗にドウチャヤラといふ副詞なり、下に必ず「知らず」と受く、清みて讀むべ
し○心も知らず 心がはりせしか否かも知られないの意○ふるさとは (一)故く都の
ありたりし故蹟をいひ、(二)旅に在る人の自らの故郷をさすに用ひ、(三)もと假初に
なじみし所をいふ、こゝには(三)の意味を用ひたり○花ぞ 梅の花を強くさせり○む
かしの香にはひける もとのまゝのよき香にはうて居るタイなり○此歌古今集春
部に「長谷に詣る毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程經て後に到れりければ、彼
の家の主、斯く定かになむ宿りはあると、いひ出だして侍りければ、そこに立てりける
梅の花を折りてよめる」とあり。

○一首の意は、主人の心は如何ならむ、變りしか變らぬかも知らぬ、法かし、昔し馴
染の宿の梅の花は、もとの通りに匂うて、私を迎へたタイと、主人に答へたるなり。

清原深養父

深養父は先祖詳ならず、延喜八年正月内匠大允に任じ、延長元年六月内藏大允に任

じ、八年従五位下に叙せらる、中古三十六歌仙に列す。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを

くものいづこに月やどるらむ

○景樹は、はく、夏の
夜は宵のまに明けはて
ぬるを、月は雲のいづ
こに隠れ宿るらむとい
ふにて、おのひゆく
りなき心より、月はい
かにあわてむすらしむ
聲をなみたるが、はく
なく面白きなりといへ
り。これ詞書の實地に
念を入れて見たる解な
り。舊説のまゝにては
、結句の譯適當なら
ざる心地す。

○宵ながら 初夜のまゝにの義、ながらは、そのまゝの意をいふ接尾語、よひは初夜、
夜中、曉と、夜を區別して、初夜の事をいふ、夜に入りてまだ程たゝぬ頃なり○明けぬ
るを 明けてしまふのをマアの意、をに餘情をこめたり○くものいづこに 曉の空に
ある雲の何所の邊にの意○やどるらむ 月が宿るならむにて、らむは例の推量の助辭
なり○此歌古今集夏部に「月の面白かりける夜、曉方に詠める」とあり。

○一首の意は、夏の夜は短く明けやすく、まだ初夜の中でありながら、明けてしま
ふものをマア、あの面白き月は、西の山まで入る暇もなからうを、曉の空の／＼雲の
所に、隠れしやらむとなり。

文屋朝康

朝康は康秀の子なりといふ、寛平四年正月駿河縁に任じ、延喜二年二月大舍人大允となる、和歌を善くし多く撰集に入る。

志らつゆに風のふきしく秋の野は

つらぬきとめぬ玉ぞちりける

○さても見事なる白露かなと見たるに、それに風の吹きまくを見れば、貫きとめぬ玉が散るも、風景の趣で、おもしろさの無盡なることをいへり。吹きしぐの一語、露を玉と吹散らすは、玉の、あら、い、い、風のさまを寫し得たり。

○志らつゆに 草葉にあく露の意、露は白く見ゆるより白露といふ○風のふきしく 風の吹き頻るにて、引きも切らず吹くことなり○つらぬきとめぬ 露を玉と見立たるにて、緒にてぬき通さぬなり○玉ぞちりける 玉が散る玉の義、ぞは例の強く指せり○此歌後撰集秋部に「延喜の御時歌めしければ」とあり。

○一首の意は、草葉の上における白露に、風が引きも切らず吹く秋の野原には、緒にもぬき通してあかぬ玉がサア、散り布く玉、よく見ればコリヤ、やはり露チャとなり。

右 近

右近は右近衛少將藤原季繩(交野少將と呼ぶ)の女なり、醍醐天皇の皇后七條后稭子に仕ふ、歌に巧なり。

わすらるゝ身をば思はず誓ひてし

人のいのちの惜しくもあるかな

○契れる人の忘れゆくをば恨みすして、猶その人の命を思ふは尤哀深き心なるべし。女の歌として殊に妙なり。かく誠ある女をおきて、こそ心もたけむ男こそ、いさあけなけれ。然るに賀茂風流の、わける折は天の通手を拍ちても思ふべきな、我が身をおきて人を悲しむは、まこといふ覺えずと雖も、あまりのまひ言なり。

○わすらるゝ 俗に忘れられるなり、ちるゝのるは受身の助動詞也○身をば思はず 我が身のことをば、何とも思はずしての意○誓ひてし 人のいのちの してと過去の助動詞を重ねてその意を強くしたるなり、命をかけても忘れじと誓言だてせし人に、その誓言に背かば、誓ひし神に罪を蒙りて、命にもかゝはるべし、故に其人の命がなり○惜しくもあるかな 惜しくも思はるゝナアにて、かなは感歎詞○此歌拾遺集戀部に「題知らず」とあり、大和物語には「男の忘れじと萬の事をかけて誓ひけれど、忘れにける後にいひ遣りける」とあり。

○一首の意は、人に忘れられる自らの身の事をば、何とも思はずして、命をかけても忘れじと誓詞を立てし事なれば、その神罰にて忘れたる人の命があるまいが、ア、其人

の命が惜しき事であるナアとなり。

参議等

等は中納言源希卿の子にて、祖父は嵯峨帝の皇子、大納言弘卿なり、天曆元年四月二十六日参議に任ぜらる、全五年正月正四位下に叙せられ、中納言に至れり、三月十日卒す、和歌を善くし、其詠多く勅撰集に入る。

浅茅生の小野の志の原志のふれど

あまりてなごか人のこひしき

○三の句のふれども
くさいはむばり
に、いと強く開ゆる
は、初一句より、いひ
下せる語勢によるもの
なり。さて、わが心な
がら心に任せぬわりな
き戀を嘆きたり。古今
集戀部に
浅茅生の小野の徒原
志のふれども妹まらめ
やいふ人なしとある

○浅茅生 茅の疎に生ひたる所にて、あさぢあふの略言、茅はつばななり、但こゝは野の枕詞に用ひたり○小野の志の原を野は、只、野といふことにて、をは接頭語なり、小さき野の義にあらず、又地名にもあらず、志の原は小竹の生ひたる原にてこれも地名には非ず、こゝまでは忍ぶれどと、いはむための序詞なり○志のふれど包みかくせとの意、元來忍ぶといふ詞に、四つの意義あり、戀ひ慕ふ意、隠す意、堪へる意、

が、この藍本なるべ
くや。

隠れて通ふ意とあり、こゝのは隠す意のなり○あまりて思ひあまりて、ほにあらはるゝ意○などか何故にかななり、俗にナゼニカに當る○人のこひしき汝が戀しいにて、人は戀人をさす○此歌後撰集戀部に「人に遣しける」とあり。
○一首の意は自らの胸の中に、つゝみかくして、外にはあらはすまいとすれど、何故にか、忍びあまるまで汝の戀しいことよとなり。

平兼盛

兼盛は是忠親王の曾孫にして、篤行王の子なり、始めて平姓を賜はる、歌を善くし、歌仙と稱せらる、頗る文才あり、少にして大學に入り、試を奉じて及第す、天曆中越前權守となり、勘解由次官、圖書頭等を経て、從五位上駿河守に至る、正暦元年十二月卒す、三十六歌仙に列す。

忍ぶれど色に出でにけりわが戀は

ものやおもふと人の問ふまで

○戀の切なる故に思ひ
よわりて、心より外に
露はるゝを露きたるな
り。古歌に

戀しさをさらぬ顔して忍ぶれば物と思ふさ
見る人ぞふふいふが
あれど、巧拙雲泥の遠
にして、更に同日の論
にあらず。この歌の妙
處は、殊に結句なまで
さぞめたるにあり。
但萬葉の「なげき渡る
か人の問ふまで」とい
ふを襲へる態なきにし
もあらず。

○愚見のこの歌と兼盛
の前の歌との優劣は、

○忍ぶれど つゝみかくせどなり○色に出でにけり 顔色にあらはれてまうたワイ
の意○我が戀は 我が戀をすることはの意○ものやあふふど人の問ふまで 物思ひを
まますかど人の問ふほどになり、やは疑の助辭、此の歌三、一、四、五、二と句を置換
へて見るべし○此歌拾遺集戀部に「天曆の御時歌合に」とあり
○一首の意は、我が戀は人に知られぬ様に、胸につゝみかくすですれど、何か物思ひ
をなさるかど、人の問ふほどに、顔色にあらはれてまうたワイとなり。

壬生忠見

忠見は忠岑の子なり、夙に歌を以て著はる、醍醐天皇召して藏人所に候せしむ、天
曆中攝津大目となり、六位を授けらる、天徳の禁中の歌合に、忠見、平兼盛に配す、
二人何れも秀逸を詠じて、判者決し難かりき、天皇兼盛の歌を吟じて措かず、終に
兼盛を以て優れりとなす、前の兼盛の歌と、此忠見のとは是なり、忠見大に望を失ひ、
遂に之を憂ひて死す、三十六歌仙に列す。

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり

ひと知れずこそ思ひそめしか

既、歌合の當時、判者
實賴これを決し兼盛し
程なれば、いづれの集
にも相並びて入れり、
宗祇、景樹は忠見の歌
を執したれど、三條西
實澄は、この歌はきこ
したる所あれども、少
しつまずいたる所あり、
兼盛は歌猶まさりたる
歟といへるは、正體の
説なるべし。

○戀すてふ 戀をするといふにて、てふはといふの約言、委しくは前にいへり○我が
名は 我が評判はの意○まだき立ちにけり 早くも立ったワイにて、まだきは豫ての
意にて、未だしき也○人知れずこそ 人即ち戀ひ人にすら、知れないやうになり、こ
そは強いひたる係り詞なり○思ひそめしか 思ひ初めたりしにマアの意なり、しか
は過去をいひ顯はす、きの助動詞の變化にて、こそ結び詞なり○此歌拾遺集戀部に
「天曆の御時歌合に」とあり。

○一首の意は、戀をするといふ我が評判は、夙くも立ったワイ、戀人にすら知られな
いで、我が心のうちだけで思ひそめたのにマアとなり。

清原元輔

元輔は深養父の孫、下野守顯忠の子なり、天曆中、河内權大目となり、大中臣能宣、
坂上望城、紀時文、源順と和歌所の寄人となり、萬葉集に訓點を施し又後撰和歌集
を撰す、世に梨壺の五人と稱す、天元中、從五位上に進み、寛和中、肥後守に任ぜ

られ、正暦元年卒す、年八十三、三十六歌仙に列す。

契りきなかたみに袖をまぼりつつ

すゑのまつやま浪越さじとは

○初句のな文字、わが心に合點して歎する意には非ず。先の女に呼びかけて押當つる意あり。これ心變りせし女の聞き耳痛うらしめむさでの業にて、一字無限の妙あり。二句、二人もたれあひて泣く處なく形容せり。結句のは文字力ある遣ひざまなり。軽く看過すべからず。

○契りきな 契約したつたナアなり、なは感歎の意をあらはす詞○かたみに 片身にて、互にの義なり○袖をまぼりつつ 涙に袖をまぼりながらの意○すゑのまつやま 本居宜長いふ、末といふ所の松山なるべしと、さて陸前にも、又陸奥にも、末の松山といふ處今もあり○浪越さじとは 浪も越すまいとはにて、心變りすまいとはの義となる、そは古今集陸奥歌に「君を置きて他心を我が持たば末の松山浪も越えなむ」とありて、末の松山は海岸に遠き所なれば、浪は越ゆまじきを、君をあきて、我に他心あらば、松山に浪も越ゆべし、然るに末の松山を、浪の越ゆる世はあるまじければ、我心もかはる時あらじといへるより、人の心のかはるを、松山に浪こゆるといひならはせるによりてなり、とはといひさして、餘情を籠めて結びて、此様に變りたりといひたり、此歌二、三、四、五、一と上へかへして見るべし○此歌後拾遺集戀部に「心變

りける女に人にかはりて」とあり。

○二首の意は、前には互に、涙に袖をまぼりながら、末の松山に浪も越すまい、越さぬ限りは變りはせぬと、契約また事であつたがなア、それを忘れて早速でに變つたなり。

中納言敦忠

敦忠は本院左大臣藤原時平の子なり、歌を善くし、音律に通ず、源博雅と並ひ稱せらる、天慶二年從三位權中納言に昇り、六年三月卒す、年三十八、枇杷中納言と稱す、三十六歌仙に入れり。

あひみてののちの心にくらぶれば

むかしはものを思はざりけり

○この歌詞淺くして感深し。心の誠いりおのづからより來れる歌なればならむ。萬葉にあひみてはこひなぐさむさ人はいへどみての後にぞ戀ひまさりけ

○あひみての 互に相逢ひて見し後の意○心にくらぶれば 心の思ひにくらべて見ればなり○むかしは 逢はざりし前はにて、今日の前は、昨日もむかしなり○ものを思

る、同案には落つめれ
ど、當に月曜のたがひ
あるのみに非ず。

はざりけり 物思ひをまなかつたタイの義、物を思はずありけりの畧○此歌拾遺集戀
部に「題をらず」とあり

○一首の意は、思ふ人に逢ひてからの後の心に、逢はずして嘆きし以前の心を比ぶれ
ば、逢はぬ昔は、まだ物思ひをせずにあつたタイ、と今の物思ひの絶えぬ苦しさを歎
きたるなり。

中納言朝忠

朝忠は三條右大臣藤原定方の子なり、天曆六年參議從四位上たり、後、從三位權中
納言にいたり、應和三年中納言たり、康保三年十二月薨す、年五十八、世に土御門
中納言と稱す、歌を善くし、其詠の撰集に入るもの多し、三十六歌仙に入れり。

あふ事の絶えてし無くばなかくに

人をも身をもうらみざらまし

○あふ事の 逢ひ見る事なり○絶えてし無くば 絶えてなくばにて、しは強めの助

○この歌古來兩説に解
せらる。一つは、この
時の歌合は皆不逢戀を
詠めれば、これも其の
意にて、樂平朝臣の

世の中にたえて櫻の
なかりせば春の心はの
どけからましといふ歌
さ、其の趣を同ううせ
りとする説と、今一つ
は下文にいへる如く、
一度逢見たりし後の作
とする説となり。いづ
れにせよ、戀しさ恨め
いさの捨斷なり。

謙 徳 公

辭○なかくに 却ての意、俗にナマナカなどいふにあたれり○人をも身をも 戀人
をも我が身をもの意○うらみざらまし 恨まないであらうの意、まじは推量の助動詞
にて、むの變化したるものなり○此歌拾遺集戀部に「天曆の御時歌合」とあり。

○一首の意は、たまにでも逢ふといふ事の、絶えてなかつたならば、逢はれぬからど
いうて、先の人を恨みたり、また我が身を恨むるやうの事は、ないであらうに、逢ふは
却て恨をますもととなりとなり。

直 廬 除 目

○契押いふ、心變れる
女に恨みたる詞はなく

藤原伊尹公は右大臣師輔の子なり、藏人少將となり、天祿元年正月右大臣に任ぜら
れ、五月攝政す、二年十一月太政大臣正二位に至り、直廬除目を見るを許さる、三年
十一月薨す、年四十九、正一位を贈り、謙徳公と諡す、伊尹才貌あり、和歌に巧なり、
村上帝の後撰集を撰ばしむるや、伊尹を和歌所の別當とし、これを總裁せしめたりと
ふ。

あはれどもいふべき人はおもほえて

して終めるが、感情淺からずさいへれど、さまでにもあらぬにや。

身のいたづらになりぬべきかな

○あはれども、ア、可愛ソウともなり、あはれは感動したる時に發する語にて、ア、ハレと感情の極にもらしたる嘆聲の、語となりたるものなり○おもほえて思はれずしてなり、おもほえては、はれの轉じたるなり○身のいたづらに身がムダ死にの意、のはがど全じ、いたづらには俗にムダナといふこと○なりぬべきかな、なつてしまうだらうかナアにて、かなは感動の辭○此歌拾遺集戀部に「物いひ侍りける女の、後つれなく侍りて、更に逢はず侍りければ」とあり

○一首の意は、我は戀ひ死すとも、ア、可愛相デヤといふべき人は、心變りしてあはれといはうとも思はれないで、身がむだ死になつてしまふだらうかナアとなり。

曾根好忠

好忠は寛和年間の歌人にして、丹後掾となる、世呼びて曾丹後、又曾丹といふ、寛和元年二月十三日圓融院の子日の御遊あり、歌人を前に召す、平兼盛、紀時文、清原元輔、源重之等なり、好忠及中原重節二人候す、小野宮右大臣等、二人の召され

ずして、坐に着きしを責め、之を追ふ、二人頭を低れ、衆皆顔を解けりといふ、二人蓋し傳説をきいて、召ありとなしたるなり、家集を曾丹集といふ、中古三十六歌仙の一人なり。

由良のどをわたるふな人梶をたえ

ゆくへも知らぬ戀のみちかな

○由良のど、淡路津名郡に在り、又丹後にもあり、この作者丹後掾となりければ、恐くは丹後の方ならむ、とは迫門にて、海水の出入する所なり、水門、港皆全じ○ふな人、機取をいふ、下記の文字を含めり○梶をたえ、梶が絶えたる如く此の意、梶を折ると解するはわろし、たえは自動詞なればなり○ゆくへも知らぬ、行きつくさきも知らぬの意にて、どうしてよきやらわからぬの意をこむ○戀のみちかな、戀の道なるかななり○此歌新古今集戀部及び家集共に「題忘れず」とあり。

○一首の意は、由良のみなを渡る船頭の梶が絶えて、何所に行くべきか、行くさきも分らぬ如くに、どうしてよいやら、我が身を慰めむすべも忘れぬ、やるせなきは

○由良の門は、風浪、急の場所と見えたり。そこにて梶の切れたらむには、いづこに漂がゆかむ、實に行方知られぬ業にこそ。さて、その序にしてわが戀の趣を述べたり。やゝたけ高いいめしく聞ゆ。

に「冷泉院東宮と申しける時、百首の歌奉りける時に詠める」とあり。

○一首の意は、風が烈しい故に、岩に打ちつかる浪の碎け散りて、岩は何とも感ぜざる如く、吾が思ふ人は何とも思はぬに、自身ばかり、いろ／＼に考へて、此頃は物思ひをたえずする事かなとなり。

大中臣能宣朝臣

能宣は神祇大副祭主頼基の子にして、歌を善くし、後撰和歌集撰者梨壺五人の一人なり、天曆中、讃岐權掾となり、天徳中、神祇大祐に至る、安和の初め小副に遷る、天祿中大副に轉じ、祭主となり、正四位下に進み、正暦二年卒す、年七十一、三十六歌仙に列す。

御垣守衛士の焚く火のよるは燃え

ひるは消えつゝ物をこそ思へ

○六帖には三四の句、晝は消えよるは燃えつゝあり。閑花集には、撰者顯輔卿の直して採られしにや。叙述の順序自然にして正

○御垣守

禁裏の御垣を守るにて、禁裏を警護することなり○衛士 古へ諸國軍閥の

竹中

い。三句よるは燃えてとあるが眞淵は執したれど、理に協はず。さて、止む時なき物思を衛士の焚く火に喩へて、假に晝夜に分ち叙したる、巧にはあれど、畢竟は、見付け物の珍しきなり。閑花集秀歌十首の一といへり。

中より京に召され、年毎に交番して、禁裏を衛る士にて、衛士府ありて之を統ぶ○焚く火の 焚く篝火の如くの意、夜衛のために焚く火なり○よるは燃え 夜は思ひの火が燃えての意○ひるは消えつゝ 晝は思ひに心も消え入りながらにて、思ひの一通りならぬを火にたぐへていひしなり○物をこそ思へ 物をこそマア思ふなり、こそのかゝり詞あれば、思へど結びたるにて、思へは思ふど全じ義をあらはす、命令の意なし○此歌詞花集戀部に「題まらず」とあり。

藤原義孝

義孝は謙徳公の子にて、天祿元年左兵衛權佐に任じ、全二年左近少將となり、全三年正五位に叙せられ、天延二年九月卒す、中古三十六歌仙に列せり。

君がため惜しからざりし命さへ

○岡のうへには逢ひつる由も、木長かれど願

ふ事も見えざれど、前後の語勢によりて、おのづから聞ゆるなり。結句のけるかなの用法注意すべし。惜しからざりし命の惜くなりぬるな、あまりの戀りやうやと、我と怪しむ意にて詠めり。戀の實情さもありぬべし。

ながくもがなと思ひけるかな

○君がため 君が爲ならばの意○惜しからざりし命さへ 惜しく思はざりし命までをなり、さへは一つある上に、なほ添はる意の助辭にて、こゝにては、契の長き上迄、命までもどいひたるなり○ながくもがなと 長くもあれかしとなり、がなは希望の意をあらはす感歎の詞○思ひけるかな 思うたワイナアの意、かなは例の感歎詞○此歌後拾遺集戀部に「女の許より歸りて遣しける」とあり。

○一首の意は、相見ぬ前は、君が爲ならば、百年の命も惜しからざと思ひしものを、逢ひ見ての今は、未の契を長かれと思ふに添へて、惜しからざりし命さへ、俄に長くあれかしと思うたワイナアとなり。

藤原實方朝臣

實方朝臣は家時の子にて、大納言左大將濟時卿の養子となる、一條天皇に仕へて、從四位上に叙せられ、左近衛中將に至る、歌に工に、才名甚だ高し、自作の歌の事により藤原行成と殿上に爭論し、行成の冠を擲つ、天皇其不敬を怒りて中將を罷む、

然れども其才を惜み、汝、歌枕を見てまゐれど、貶して陸奥守を授け、位は一階を進む、長徳四年任所に卒す、中古三十六歌仙に入れり。

かくとだにえやはいふきのさしも草

さしもあらじな燃ゆるおもひを

○この頃の戀歌は、只側にやさしく仕立てむ事を旨として、其の弊は、遂にこの歌の如きものとなれり。艾の縁語もて面白く、鎖りつゞけたるには相違なれど、再三再四吟味するに従ひ、興味のやういふに索然たる態あらむ。この作者は他にいくらか名歌あるものな。

○かくとだに かくくどデサヘモの意、だには輕きを擧げて重きを言外に思はしむる助辭○えやはいふきの えやはいふを、山の名の伊吹にいひかけたるにて清濁相通はせたり、えは副詞にて下に反語あり、俗にヨウといふに當る、やは反語の助辭、心に思ふ事を口にいふ事か、ヨウいはれねばの意、伊吹山は下野國にあり、近江國のにあらず○さしも草 艾の事なり、さしはさしつくる意より添はれり、伊吹山の艾の如く此の意、次のさしもに重ねて詞を諧へたり○さしも 然きもの義、さもど全む、しは強辭○あらじな 我が思ふ人は知るまいナアの意、じは推量の打消をいふ助動詞、なは感歎詞○燃ゆるおもひを 燃ゆるやうな思ひをマアにて、いひさして餘情をこめ、さて、おもひのひに火をいひかけたり○後拾遺集戀部に「女に始めていひ

遣しける」とあり。

○一首の意は、せめてかく／＼なりとサへも、いへばよけれど、ヨウいはれねば、只、胸の中にて爰の燃ゆる様に、思ひに焦るゝ身を、然ども我が思ふ人は思ひ知るまいナアとなり。

藤原道信朝臣

道信朝臣は法住寺太政大臣爲光公の子にして、九條右大臣師輔公の孫なり、粟田關白道兼の養子となる、寛和二年十月從五位上に敘し、侍從となり、三年右兵衛佐、永延二年左近衛少將從四位下にいたり、正暦二年左近中將となり、五年從四位上に叙せらる、同年卒す、年廿三、中古歌仙三十六人の一人なり。

明けぬれば暮るる物とは知りながら

なほうらめしき朝ぼらけかな

○明けぬれば 夜が明くればの意なり○暮るる物とは 日が暮るゝ物とはなり○知り

○時のまも離れ難き切なる情見たり。いにしへは、夫婦も、はぐめの間は、晝は一所に住まはすして、夜のみ逢ふ習慣なりければ、

かくいへる也。ひたすら逢れたる方の戀路の思ふべからず。古歌を讀む者は、こゝに注意あらまほしき事ぞかし。

ながら 知りて居ながらもの意、ながらは接尾語、俗言の意と同じ○なほ 俗にヤハリと同じ○朝ぼらけかな 夜明け方ヂヤナアの義○此歌後拾遺集戀部に「女の許より雪の降り侍りける日、歸りて遣はしける」とあり。

○一首の意は、夜が明くれば日が暮れて、日が暮るれば、また逢ひ見らるゝ事は、知ッて居ながらも、今の朝の別れがつらくて、恨めしく思はるゝ夜明け方かなとなり。

右大將道綱母

道綱の母は攝政藤原兼家の室にて、正四位下藤原倫寧の女なり、歌の巧者なり、蜻蛉日記を著す、兼家の通へりし程の事を、書きたるものなり、中古三十六歌仙に列す。

歎きつつひとりぬる夜の明くるまは

いかに久しきものとかはふる

○歎きつつ 歎息しながらなり○ひとりぬる夜の 獨りで寝る夜のなり○明くるま

○蜻蛉日記によれば、三夜ばかり隔て、兼家の背つれたるを恨みて、わざと戸をば明けさせざりしなり。さ

て門あくる間をたに、立ち煩ひぬと仰せらるゝ、御心に引當て、此方の久しきを覺しやり給へと、いひおくれる當意即妙、實に手練の業にて、賞美すべし。宜なり、流石の薄情なる三目雄の筆家をして、

げにやげに冬の夜ならぬ横の戸も遅くあるは苦しかりけり。いと道理なりつるはと申きて、同感に堪へざらしめし事は。

○圖書によれば作者のいと若き頃なるべし。

は夜の明くる間に、戸を開くる意をかけたなり○いかに久しきものとかはる。ドレホド待ち遠しいものとか、思ひ給ふなり、かは疑問の助辭にて、はは軽く添へたるまでなり○此歌拾遺集戀部に「入道攝政兼家公まかりけるに、門を遅くあければ、立ち煩ひぬといひ入れて待ちければ、詠みて出しける」とあり。

○一首の意は、門の戸をあくる間を、立ち煩ふと仰せたまへど、君の御出なき夜を、歎息しながら、獨りで寝ます夜の明くる間は、ドレホド久しきものと思ひたまふかとなり。

儀同三司母

儀同三司母は從二位高階成忠の女、從三位貴子とて、文事に通達して、男子を壓倒する稱譽あり、中關白道隆公の室なり、伊周公を生む、伊周勅によりて、寛弘二年大臣の下、大納言の上に列せられ、同五年大臣に准ぜられたるにより、儀同三司即ち三公に同じき待遇を受く、よりて自ら號したるなり。

わすれじの行末まではかたければ

今日をかぎりの命ともがな

○忘れじの 永く忘れまいとの契りのなり、じは未來にかけて打消す助動詞○行末までは 一生の終りまではの意○かたければ 續くことはむづかしいからの意○今日をかぎりの命ともがな 今日を限りとして、死にたいものデヤナアなり、がなは希望の意の感歎詞○此歌新古今集戀部に「中關白通ひ初め侍りける頃」とあり。

○一首の意は、いつまでも忘れまいとの御契はあるが、これから先、永く變らないことは、頼み難いことなれば、行末忘れらるゝ憂き目に逢はむより、今日を命のかぎりとして、すぐ死にたいものデヤナアとなり。

大納言公任

公任は關白藤原頼忠の長子なり、人となり聰敏にして、博く衆藝を綜べ、詩歌に巧に、音楽に長ず、官は正二位大納言に至り、世に四條大納言と稱す、長久二年正月薨ず、年七十六、和漢朗詠集、新撰髓腦等著書多し、三十六歌仙の撰者にて中古三十六歌仙の一人なり。

統

たきの音は絶えて久しく成りぬれど

名ころ流れてなほきこえけれ

○上に音といひ下に聞えと受け、又、水の縁語もて、名の傳はるを流るといへる、洒落の面白くて、集にも采られたる。洒落は幾度も繰返して味ふべき性質のものにあらざる。ては、歌として、餘り價值少く作たる事を知れ。又、その用法後さまなり、心得べし。この作者も、他に名歌多かるを、なごてこれなげ振はれむ、いさふべし。

○たきの音は、瀧の水の落つる音はの意○絶えて久しく成りぬれど、絶えて久しい時を経たれどなり○名こそ流れて、瀧の名は世上に傳はりての意、瀧の縁により流れてどいへり○なほきこえけれヤハリ名高いものチャワイにて、音どいへる縁により聞えどいへり○此歌拾遺集雜部に「大覺寺に人々數多まかりたるけるに、古き瀧を見て詠み侍りける」とありて、初句瀧の糸はどあり、再び千載集雜部に入りて、初句は今の如し、大覺寺は嵯峨にあり、嵯峨天皇の離宮にて、瀧を落して瀧殿を作らせ給ひし所なり。

○一首の意は、瀧の水の落つる音は、うち絶えて年久しくなりたれど、有名の瀧ゆゑ、其名は廣く世上に傳はりて、今でもヤハリ、名高ものチャワイと、名の末代なるを感歎したるなり。

和泉式部

式部は大江雅致の女にて、歌を以て顯はる、初め冷泉院の第四皇子、帥宮に寵せらる、和泉守橘道貞に嫁したるによりて、この名あり、女、小式部を生む、道貞没する後、上東門院藤原彰子に仕へ、後再び藤原保昌に離す、中古三十六歌仙に入れり。

あらざらむこの世の外の思ひ出に

今ひとたびの逢ふこともがな

○あらざらむ あらずあらむの約りたるにて、此世に在らぬやうにならむ、即ち死せむとするの義なり○この世の外この世以外の世にて、死後の生の意○思ひ出に 思ひ出しぐさになり○今ひとたびの逢ふこともがな モウ一度、汝に逢ふ事を志たいものチャナアにて、がなは希望の意ある感歎詞○此歌後拾遺集戀部に「こゝち例ならず侍りける頃、人の許に遣しける」とあり。

酒落

酒落

○上句の措辭器用に於て、今死ねばいりなる病人の作とも覺えぬ程なれど、一語詞遣ひの極めて、巧緻なる作者の事なれば、何時さても、こればかりの事はいひ得るなるべし。

○一首の意は、病が重りて、死せむとする我が今いまはの際、死ぬ後世の思ひ出しぐさに、戀しき君に、モウ一度逢ひたきものヂヤナアとなり。

紫式部

式部は式部丞藤原爲時の女なり、右衛門權佐藤原宣孝シノノブに嫁す、資性敏慧にして強記なり、和漢の文籍に涉り、兼て典故に通ず、宣孝早く歿して後、上東門院藤原彰子に仕へて、才名あり、有名な源氏物語五十四帖は、式部の著す所なり、一條天皇讀み給ひて、大にこれを賞して宜く、是れ善く日本紀を讀みたるものなりと、人呼びて日本紀の局ツグといふ、古來女流文學者の第一位を占む、中古三十六歌仙に列す。

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに

雲がくれにし夜半のつきかな

○めぐり逢ひて 昔の知己にめぐり出逢ひてなり○見しやそれともわかぬまに 昔見たはそれかともまだよく思ひ分かれ間になり○雲がくれにし 月が雲に隠るゝこと

○式部其の宮仕せる上東門院の御方などにて、幼馴染の友に行逢へるが、餘り打解けても語らばで過ぎつるうちに七月十日頃の月入る頃はひに、友の立歸

りて去にければ、詠みて贈れるならむ。大凡十日頃の月は、半夜に隱るゝものなれば、打任せて雲隠れにし夜半の月觀といへるにて、雲に重き意あるに非ず。要するに、譬喩を最も功者に用ひたる歌なり。

大貳三位

大貳三位は藤原宣孝の女にして、賢子カゴコといふ、母は紫式部なり、大宰大貳高階成章の妻となる、一條天皇の乳母にて、三位に叙せらる。

ありま山ゐなのささはら風ふけば

いでそよ人をわすれやはする

○男にあたりて強くいへる意面白し。但、有馬山は猪名野とは遙に隔りたれば、この

歌の、露の野邊のやうに續けて詠めるは道はす。居ながら名所を知りたる歌さやいはまし。

○ありき山 攝津國有馬郡に在り○あなのささはら 攝津國河邊郡猪名野にて、小竹の多ければ笹原といふ○風ふけば 風が吹けばの意にて、こゝまでは、下のそよといはむ序なり○いでそよ イヤモウそれよの意、いでは發語にて、俗にイヤモウと全じそよは其れよの約りたるにて、風吹きて葉と葉と摺れ合ひて、そよ／＼する意にかけていへり○人をわすれやはする 君を忘れるものか、忘れはせぬにて、やはは反語なり○此歌後拾遺集戀部に「離れ／＼なる男の、覺束なくなど、いひたりけるに詠める」どあり。

○一首の意は、君は覺束ないど仰せらるれど、イヤモウドウシテ、その事よ、私は契りし君を忘るゝものか、忘れはせぬ、却りて、君こそ心許ないとなり。

赤染右衛門

右衛門は、赤染右衛門尉時用の養女なり、右衛門の母、初め平兼盛の妻たりしが、懷妊中にて離縁となりて、女子を擧げ、時用に嫁したり、この女子即ち衛門なり、初め藤原道長の妻倫子に仕へ、後大江匡衡に嫁す、其子舉周曾て病に罹りし時、之

を憂ひ、住吉大神に、己が命を以て代らむことを祈り、歌を奉る、後幾もなくして、子の病癒ゆといふ、夫匡衡を助けて、才名あり、女、江侍従亦歌を以て著る、中古三十六歌仙に列せり。

やすらはで寝なましものをさよふけて

かたぶくまでの月を見しかな

○露を濡みしを悔いたるやうにいひなして、情の切なる由を述べ、且は恨みないひて遣れるなり。傾くまでの大層にいひ立てたれば、入るには間のある望の夜頃の月にて、一夜待ち明くまいと見えたり。素性が「今來むさいひしばかりと詠めるこ、同巧異曲の妙あり。

憑

○やすらはで やすらはずしての約言にて、猶豫せずになり○寝なましものを 寝たであらうものをマアにて、をのは例の餘情を籠めたり、ましは動作を未然に想像する助動詞なること前にいへり○さよふけて 夜更けてにて、さは發語にて意味なく、語勢を助くるのみなり○かたぶくまでの月を見しかな 西の方へ入るまでの月を見て居たワイナアの意にて、長く起きて居りしことをいへり○此歌後拾遺集戀部に「中關白道隆少將に侍りける時、兄弟なりける人に物いひ渡り侍りけり、愚めて來ざりけるつどめて、女に代りてよめる」とあり。

○一首の意は、君が來ぬものなら、猶豫せずと、寝たであらうものを、今か／＼と夜

ふくるまで待ち受けて、西の方へ傾くまでの月を、眺めし事かなとなり。

小式部内侍

内侍は和泉守橘道貞の女にて、母は和泉式部なり、幼にして和歌を善くす、時人其母の潤色する所なりとなす、會、母式部、後の夫藤原保昌に従ひて、丹後に赴きたる時、禁中に歌合あり、中納言定頼、小式部を試みむと欲し、丹後の行李還り来るや否やを問ふ、小式部定頼の袖を捉へて、此歌を口占す、此より才名大に著はる、惜むべし早世す、内侍は内侍所の掌侍ナインを汎稱す。

大江山いく野のみちのとほければ

まだふみも見ずあまのはし立

○おもふにふみの踏む意より、天の橋立をば、取合せならむ。さるは、橋立即ち梯子の事にて。踏みへ上とする物なればなり。丹後あたりの地名を詠み入れたるのみならず、又、此巧をも打ち添

○大江山 丹後國與謝郡に在り○いく野の道のとほければ 但馬國朝來郡に在り、生野を行くの意にかけて、行く道の遠ければといへるなり○まだふみも見ず 未だ文も見ずを、丹後國の天の橋立を、踏みも見ずにかけてなり○あまのはし立 丹後國與謝郡

へたれば、くは、人口に膾炙せられしならむ。

に在り、安藝の宮島、陸前の松島と、日本三景と稱せらるる名所なり、丹後からの文も見ざる事を、其國の名所を擧げていひたるにて、主として丹後をさしていへるなり○此歌金葉集雜部に「和泉式部、保昌に々して、丹後國に侍りける頃、都に歌合のありけるに、小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを、中納言定頼、局の方にまうで来て、歌はいかにせさせ給ふ、丹後へは人遣はしけむや、使はまうでこずや、いかに心許なく、おぼすらんなど戯れて立ちけるを、引留めてよめる」とあり。

○一首の意は、母の下りて居る丹後の國は、大江山や、生野などを通らねば、行かれぬ遠き所なれば、仰の通り使は歸り來ぬ故、まだ丹後の母からの文も見ませぬといひて、天の橋立を踏み見ぬにいひそへたり。

伊勢大輔

大輔は伊勢の祭主大中臣輔親の女なり、歌を善くし、紫式部、和泉式部等と、才名を齊くし、俱に上東門院に仕ふ、筑前守高階成順の妻となる、初めて宮に入る時、關白道長の側に侍す、時に櫻花を献ずる者あり、道長筆視を取りて、大輔に授け、

歌を題せしむ、大輔直ちに此詠あり、中古三十六歌仙に入れり。

いにしへの奈良のみやこの八重櫻

けふ九重にほひぬるかな

○いにしへにけふ、八重に九重を對へたる、作者、粉骨の處なるべし。眞淵は、口ききらの賢けなるは、實の高き歌に非ずと論ひ、景樹は、その當意によく適へるを最上とす、この歌ひきき、姿ならむやと駭ぜり。

○いにしへ 往にし方の義にて、過ぎ去りし昔をいふ○奈良のみやこの八重櫻 奈良の都にて咲きし八重櫻の意、奈良は大和國添上郡にありて元明帝以來、七代の帝都なれば、都といへり○けふ九重に 今日禁裏にての意を、今日此所にといひかけたり、九重とは禁裏の一稱、そは九天に擬して天子九門といふよりしていふなり○にほひ句にて、色にも、香にも、聲にも、氣色にも、何となく優にやさしき趣の顯るゝことをいふ、こゝには花のオノノリとして、いふにいはれぬ美あるをいへり○此歌詞花集春部に「一條院御時、奈良の八重櫻を、人の奉りける其折、御前に侍りければ、其花を題にて、歌よめど仰言ありければ」とあり。

○一首の意は、昔の都の奈良にて咲き出でし八重櫻が、二度時を得て、今日九重の天子の御前にもてはやされて、えもいはぬ美しき花の色を、あらはしたワイナアとな

り。

清少納言

少納言は肥後守清原元輔の女にして、才學あり、一條天皇の皇后、藤原定子に仕へて、春遇を受く、皇后、雪後、香爐峯の雪はと仰せありし時、納言即ち起ちて、簾を掲げしことは、時人の嘆稱する所なり、皇后其才華を嘉みし、内侍となさむと欲す、適皇后の兄、伊周流竄せらるるに遇ひて果さずと、有名なる枕草紙はその著なり、中古三十六歌仙に入れり。

夜をこめて鳥の空音ははかるとも

よにあふさかの關はゆるさじ

○女ながら漢土の故事を知れりといふよりして、評判高くなれる歌にて、當意の妙はあれども、決して秀歌といふべくもなし。さりさて、行成卿の逢坂は人こえやすき

○夜をこめて 夜明けに先ちての意、こめては俗にツメルことにて、夜を短く思はするの意をいへり○鳥の空音は 雞の偽りの鳴き聲をばの意、そらは虚事などの虚と全む○はかるとも 欺くどもにて、俗にダマスともなり○よに 決してなどといはむ程

關なれば鳥もなれど
あけて待つさかいふ
返歌は、又こゝなく劣
れり。尤も行成卿は書
こ上手なれ、歌はあ
まり好まざりしなり。

の副詞なり○あふさかの關 近江國に在りし關所なること前にいへり、男女相逢ふを、
函谷關の故事に思ひ寄せて、かけていへり、支那の昔、齊の孟嘗君、秦の相となれりし
時、或人の讒言によりて殺されむとしたれば、逃れむとて、夜中函谷關と云ふ關所ま
で來れども、此關の掟にて、鶏の聲せぬうちは、關を開けざるにより、大に困りし
が、孟嘗君の食客に、鶏の聲をよくする者ありて、鳴聲を真似けるに、關所の雞も誠
の雞と思ひけむ、つれて鳴きければ、關所の戸はあきて、通るゝ事を得たるなり○ゆ
るさむ 許すまいにて、むの字前に委し○此歌後拾遺集雜部に「大納言行成、物語な
どして侍りけるに、内の御齋に籠ればとて急き歸りて、翌朝鳥の聲に催されてといひ
遣せて侍りければ、夜深かりけむ鳥の聲は、函谷關の事にやといひ遣しけるを、立ち
かへり、これは逢坂の關に侍るとあれば詠める」となり。

○一首の意は、深夜にまだ鶏の鳴きもせぬに、その虚鳴に、函谷關の關守は欺かれて通
すとも、君と我と逢といふ、逢坂の關にては、さやうの偽にては、決して通しは致す
まいとなり。

左京大夫道雅

道雅は藤原伊周公の子なり、長和五年從三位左中將、萬壽三年四月右京權大夫に遷
り、寛徳二年十月左京大夫に至る、天喜三年七月薨す、年六十三、中古三十六歌仙に
列す。

いまはただ思ひ絶えなむとばかりを

人づてならでいふよしもがな

○いまはただ 今はいたすらにて、俗に今はモウなり○思ひ絶えなむとばかりを 思
ひ切つてまははうといふ一言だけをの意、なむは半過去の助動詞のなに、未來の助動詞
のむの添はりたるにて、未來のとを過去にいひなす助動詞○人づてならで 人づたへ
ならずしての略言にて、傳言ならずしての意○いふよしもがな 戀ひ人にいふ寄るべ
もあればよいがナアの意○此歌後拾遺集戀部に「伊勢の齋宮 三條院第一皇 女當子内親王 わたりより上
り侍りける人に、忍びて通ひける事を、公にも聞しめして、まもり女など附けさせ給

この可歌
こそと大
にゆふと

○人傳ならでいふよし
希ふは、實には思ひ絶
えざる證據にて、畢竟
逢ひ難きあまりのこ
つけ言なり。切なる情
おもひやられぬべし。

ひて、忍びにも通はずなりにければ、詠み侍りける」どあり。

○一首の意は、いひたきことは多けれど、人の許さぬことにて、逢ひがたければ、今はモウ一向に思ひきつてまきはうといふ一言だけを、人の傳言でなくて、逢うておきくにいふ寄るべもあればよいがナアとなり。

權中納言定賴

定賴は藤原公任の子なり、寛弘、長和中、侍從となり、寛仁元年正四位下に叙せられ、藏人頭に補せらる、治安二年從三位に進み、長元年中、權中納言に任ぜらる、長久三年敕を奉じて、宮殿の榜を書す、特に賞して正二位に叙せらる、寛德二年薨ず、年五十一、姿儀美に、歌を善くし、書に巧みなり、中古三十六歌仙に入る。

あさぼらけ宇治の河霧たえぐに

あらはれ渡る瀬々のおじろ木

○あさぼらけ 語釋前に委し○宇治の河霧 宇治川は山城國宇治郡に在り、宇治河に

○宇治は山ふさふさにて、河上の霧も餘所より深く立つに、夜の明けゆくに従ひ、霧の斷續する眼前の景氣、つきもなく面白し。こ

の首首中にては、見安き歌なり。

立ちし霧がの意○たえぐに 俗にトギレ／＼にと全じ○瀬々のおじろ木 瀬は水あさき所をいふ、瀬々は、その瀬も、この瀬もといふ意、おじろ木は、川の瀬に數多の竹木を編みて列ねあき、網に代へて魚を捕ふるものにて、此河にては、冬日氷魚を捕るにつきて有名なり、此句四句の上に付けて見るべし○此歌千載集冬部に「宇治にまかりて侍りける時、よめる」とあり。

○一首の意は、夜の明け方に、宇治河を見渡せば、立渡れる河霧の、トギレ／＼に消えて、瀬々に立ててある網代木の、其處此處にあらはれたる景は、誠によろしとなり。

相模

相模は源賴光の女なり、大江公資の妻となる、公資相模守となるによりて號すと、本名乙侍從といひ、祐子内親王家の女房たり、中古三十六歌仙の一人なり。

恨みわびほさぬ袖だにあるものを

こひに朽ちなむ名こそ惜しけれ

○思ふ人はつれなきうへに、戀すさいふ浮名の立たむは、いかに心苦しむらむ。乾つぬ袖

は齒るもの故、其の響にて名を墮すことを朽つといへるの詞のあやなり。

○恨みわび つれなき戀人を恨みわづらひてなり、わびは思ひ悩むことをいふ○はさぬ袖だに 涙のために乾かぬ袖さへもなり、はさぬはほされぬの略、だには輕きをあげて、重きを言外に證する助辭○あるものを ありて辛いものをマア其上にの意にて、例の餘情を籠めたり○こひに朽ちなむ 戀の爲に朽ちてしまふの意、なむは未來を過去にいひなす助動詞、委しくは前にいへり○名こそ惜しけれ 我が名こそ惜しいタイの意にて、感歎の意こもれり○此歌後拾遺集戀部に「永承六年内裏の歌合に」とあり。

○一首の意は、つれなき人を恨み煩ひて、涙のために乾かぬ袖さへ辛いものをマア、其のうへに、戀のために世間に嘯が立ちて、朽ちてまはさう我が名が、誠に惜しきこととなり。

前大僧正行尊

行尊は參議源基平の子なり、平等院僧正と號す、小にして近江の園城寺に出家し、好みて四方を遍歴す、保安四年延暦寺の座主に補せられ、天治二年大僧正に進む、長

承四年二月寂す、年七十九、性書を好む、嘗て柿本人麿、衣冠し机に凭りて、詠吟するを夢み、後、自ら寫す、圖甚だ生意あり、これ人麿を書くの初めにして、後世畫家の粉本となる。

諸どもにあはれと思へやまざくら

はなよりほかにある人もなし

○諸どもに 相互になり○あはれと思へ あはれなりと思への意、あはれは感歎詞より出でたる詞なること、前にいへり、俗に不憫と全むければ、こゝにてはア、不憫ぢやなつかしいと思ひくれよとなり○やまざくら 山櫻よと呼びかけたり、此句初めに置きて見るべし大和國吉野郡大峰に咲ける櫻なれば、山櫻といへり、○ある人もなし 知り合の人もないの意○金葉集雜部に「大峰にて思ひがけぬ櫻の咲きたりけるを見てよめる」とあり。

○一首の意は、山櫻よ、我は汝をなつかしいと思ふによりて、汝もわれをア、不憫ぢやなつかしい人よと思ひくれよ、この山奥には花より外に、何一つ、もどからの知り合

○この作者は山伏にて、吉野の金の御嶽に卯月の峰入りあたるが、珍しく櫻の咲けるを見て、懐かしさの餘り、知る人によそへて、真々相思はむとの遙懐、さる山の中に、只一人行ひすまし居るさと思ひつられて、いさみよとく。

ひとてはないによりてどなり。

周防内侍

内侍は周防守平維仲の女なり、後冷泉院に仕へ奉る。

春の夜の夢ばかりなる手まぐらに

かひなく立たむ名こそ惜しけれ

○かひなくを、實に違ふ事なくてかひなき由に、正明の降けるは當らず。これは、夢の間ばかりはさむ枕に立たむ名の甲斐なきなり。又、幽霊の、腕をいひかけたりと見るべからず、歌悪しくなる故なりといへるはいかに。悪しきほもさよりにて、腕のいひかけなる事はうつなし。

○春の夜の 春の短き夜の意○夢ばかりなる 夢ほどなるにて、チヨツトの間の意○手まぐらに 人の手枕をまたによりての意、腕を枕とすることなり○かひなく立たむ 何の詮もなしに立たうの義、かひなしは詮のなきことにて、手枕の腕にいひかけたり○名こそ惜しけれ 浮名こそ惜しい事であるタイの意○此歌千載集雜部に「二月ばかり月の明き夜、二條院にて、人々數多居明して、物語り侍りけるに、内侍周防倚伏して、枕もがなど忍びやかに云ふを聞きて、大納言忠家、これを枕にとて、肘を籠の下より、さし入れて侍りければよめる」とありて、忠家卿の返歌にも、「契りあり

○この百首中の女の歌は當意即妙の口實を旨

○さして探り入れたりとおぼし。その心して見むを要す。

て春の夜ふかき手枕をいかにかひなく夢になすべき」とあり。

○一首の意は、短い春の夜の夢ほどなる、チヨツトの間に、手枕をまたばかりにて、何の詮もなう、立たう浮名は惜しい事であるタイとなり。

三條院

第六十七代の帝なり、御名は居貞と申す、冷泉帝の御子にして、御母は太政大臣兼家の女、藤原超子なり、寛弘八年六月十三日踐祚せられ、十月十六日御位に即き給ふ、天皇藤原道長の專權を惡み、大納言藤原實資に依頼して、道長を抑へむと志たまひしに、事成らずして遂に明を失ひ、長和五年正月廿九日御位を皇太子敦成親王に譲り、寛元元年五月五日崩ず、御年四十二、山城國葛野郡北山陵に葬る。

心にもあらでうき世にながらへば

こひしかるべき夜半の月かな

○禁中の月に對して名残を惜しませ給へる大御歌にて、感慨極りなし。その世の事をもな思ひめぐらして、大御

○心にもあらで 我が思ふ心にもあらざしての意○うき世に 憂き世にて、世の中を

心を推量りまゐらすれば、あまりに長くて、申さむ間もあらずなむ。

つらき事に見ていふ語なり、天皇の御心にあらざして、道長の爲に、御位をありさせ給へるにより、世の中を志か覺したるなるべし○ながらへば 生きながらへて居るならばの意○こひしかるべき 戀しくありさうの意、べきは推測する助動詞○夜半の月かな 明に清みわたる今夜の月かなと歎かれたるなり○此歌後拾遺雜部に「例ならずあはしまして、位など去らむと思しめしける頃、月の明かりけるを御覽じて」とあり。

○一首の意は、心ならずも、このつらい世にながらへて居やうならば、定めて戀しく思ひさうな、禁中の今夜の明かなる月かけなるかなと嘆き給ひたるなり。

能因法師

能因は俗名永憶、橘元憶の子なり、歌を善くす、初め文章生に補す、後、薙髮して攝津の古曾部に隱る、著す所に、玄々集、歌枕、八十島記あり、中古三十六歌仙の一八なり。

あらし吹く三室の山のもみぢばは

こと其處のけしきには心を入れぬなるべし、實地實情の歌に非ずと、地勢の上より古人の論難あり。猶よく考へていふべし。

たつたの川のにしきなりけり

○あらし吹く 嵐が吹き散らすの意○三室の山 大和國平群郡龍田川の西岸、神南村の背後にあり、古歌に其詠多し、又神南備山ともいへり○たつたの川の 三室山と全じく平群郡に在り、源を北生駒村に發し、大和川に注ぐ、文武天皇始めて此川の紅葉を詠じ給ひてより、多く古歌に入る○にしきなりけり 錦であるツイの意○此歌後拾遺集秋部に「永承四年内裏歌合によめる」とあり。

○一首の意は、嵐が吹き散す三室の山の紅葉ばは、流れ來れる龍田川にての錦であるツイと、紅葉の川水に流るゝ景色を賞したるなり。

良暹法師

良暹は山城國愛宕郡大原に住めり、能因と同時代の人なり。

寂しさに宿を立ち出でてながむれば

いづこもおなじ秋のゆふぐれ

○三界惟心の道理を述べたるなりなど、事々しく説き及したる古註もあれど、僻事なり。

只、大原の山中に獨居
ざる蜀法師、秋の夕
暮、悄然と佇立めるさ
まな思ふべきのみ。さ
らば、寂寥たる秋晩の
景氣も眼前に浮びて、
面白きにや。後拾遺集
秀歌十首の一なり。

○寂しさに サビシイによりての意、下のさは接尾語にて、形容詞を名詞とする爲に
添ふ○宿を立ち出でて 我が宿を立ち出でてなり○ながむれば 物思しつゝ見出づる
を詠むといふ○いづこもあなむ 何所も變らぬなり○秋のゆふぐれ 秋の夕暮の寂し
さはにて、四の句の上につけて見るべし○此歌後拾遺集秋部に「題志らず」とあり。
○一首の意は、物さびしきに堪へかねて 我が宿を立出でて、餘所はかくあるまじ
ど、ながめて見れば、秋の夕暮の寂しさは、何所も變りはなしとなり。

大納言經信

經信は權中納言源道方卿の子なり、博識多藝にして和歌に巧に、又、書畫音樂に通
じ、藤原公任と前後並び稱せらる、永承年中、正二位權大納言たり、寛治五年大納
言、嘉保元年に太宰權帥となり、嘉德元年正月或は永長元年正月太宰府に薨すとい
ふ、年八十二。

ゆふされば門田の稻葉おとづれて

蘆のまろ屋にあきかぜどふく

○九屋守る人になりて
泳めるなり。其の吟風
今猶面を吹く如し
と、古人も稱へたる名

歌にて、あらべ優に、
たけ高し。蓋し、この
題の一世の傑作なら
む。

○ゆふされば 夕方になればの義、夕しありの約といふ○門田 門前の田なり○おと
づれて 風の吹き渡るをかくいへり、俗に見舞うての意○蘆のまろ屋 蘆などを以て假
初に葺きつくれる家をいふ、田舎にて、小家の屋根を四方より一様に葺きて、頂にて
一所に葺き寄すれば、屋根の形丸く見ゆるより、九屋といふ○此歌金葉集秋部に「師
賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて、田家の秋風といふ事をよめる」とあり。

○一首の意は、田舎にては夕方になれば、門前の田の稻葉を、そよそよと音づれて、
芦葺の小家に、涼しい秋の風が吹いて來ると、田家の實景を、ありのままに述べたる
なり。

祐子内親王家紀伊

紀伊は散位平經方の女にして、紀伊守重經の妹なり、後朱雀院の皇女、祐子内親王
に仕へたり。

おとにきくたか師の濱のあだ波は

かけじや袖の濡れもこそすれ

○この歌は中納言俊忠
が
人まねね思ありその
うら風に波のよこそ

いはまはしけれど詠め
る返しなり。贈歌の趣
に從ひて、波を借り
來りて、其の縁語もて
一首を仕立てたる、巧
者の仕業なり。下句の
いひなしのいひ口實
さ、作者のいひなりを
想見するに足る。

○おどにきく 世間の評判に聞くの意○たか師の濱 高石濱とも書す、和泉國大島郡
高石村の海邊なり、古歌に多く詠まる、高しをいひかけたり○あだ波は 動きて定ら
ぬ波をいひて、人の心の動きて變り易きにいへり○かけじや 波をかけまいよにて、
しは濁りて讀むべし、契を結ぶまいよの意をよそへたり、やは感歎の詞○袖の濡れも
こそすれ 波をかけたなら、袖も濡れもせうにて、契を結べば、涙のために袖も濡れも
せうの意をよそへたり○此歌金葉集戀部に「堀川院の御時、艶書合によめる」とあ
り。

○一首の意は、世間に評判の高い、心の變り易い人には、契を結ぶまいよ、もし契を
かけたなら、棄てられて、涙に袖の濡れもせうと思へばとなり。

前中納言匡房

匡房は信濃權守大江成衡の子なり、博學強記、朝典に通ずるを以て稱せらる、後三
條天皇の東宮に在るや、匡房學士となりて啓沃す、天皇即位するに及びて、藏人に
補す、諸官を経て嘉保元年權中納言となり、承德元年太宰權帥を兼ね、正二位に進

○調づひさはやかに

長ある歌なりと、古來
の定評ありて、まこと
にさもと覺ゆるを、景
樹の體にて證は遠きは
ぞ立て龍むるものなる
を、尾上の深き方をお
きて近き外山の霞を立
たすもあれど願ふべき
ものならむやといへる
は非なり。單に、花の
前、霞の立つなさいふ
事を、高砂の尾上の標
に對して、外山の霞と
いへるなり。調づひさ
ある事を忘るべから
ず。

たか砂の尾上のさくら咲きにけり

外山のかすみ立たずもあらなむ

む、嘉祥中、中納言を罷め、再び權帥となる、世に江帥と稱す、天永二年十一月薨
ず、年七十一、江家次第第二十一卷の著あり。

○たか砂の尾上のさくら 高砂は播磨國加古郡、尾上も全所に在りて、名高き風景の
地なるを以て、常に相連ねて呼びたり、遂に轉りて、よのつねの山の尾の上にかけて、
歌に多くいへること前にいへり、尾は山の峯をも、裾の引延へたる所をもいふ、こゝ
には峰をさす、遙か向ふの山の峰の櫻がの意なり○咲きにけり 咲いたタイなり○外
山 奥山に對して端なる山をいふなり○立たずもあらなむ 立たずあればよいにて、
なむは願ひ望む意をあらはす助動詞、未來を過去にいふのとは異なる○後拾遺集春部
に「内大臣の家に人々酒たうべて、歌よみ侍りけるに、遙に山の櫻を望むといふ事をよ
める」とあり。

○一首の意は、遙か向ひの山の峰に、櫻の花が咲いたタイ、其手前にある端山に、霞

が立たずもあれかし、彼の花が見えぬやうになる程にとなり。

源俊頼朝臣

俊頼は大納言經信の子なり、堀河、鳥羽、崇徳の三朝に仕へ、右近衛少將兼木工權頭、左京權太夫從四位下に叙任せらる、才藝ありて、最も和歌を善くし、宗師と稱せらる、天治の初、勅を奉じて、金葉和歌集を撰ぶ、資性温厚能く人を愛す、著す所、散木樂歌集、山水髓腦、無名抄あり。

うかりける人をはつ瀬の山おろし

はげしかれとは祈らぬものを

○初瀬に戀を祈る事は、住吉物語にも見えたり。うかりける人なよりばげしかれまばにかゝる體なり。三句一本山おろしよと文字あるは、序の體もこさわりのまゝのはず。さて、定家朝の近代秀歌に、心深く詞心に任

○うかりける人を 愛くありけるにて、つれなかつた人となり○はつ瀬の山おろし泊瀬山は大和國式上郡に在る山にて、山上に有名な長谷寺あり、天武帝の御宇の造營にて、初め泊瀬寺といひ、十一面觀音を本尊とするなり、こゝは泊瀬山の山おろしの如くにて、はげしといはむ序に用ひたるなり、山おろしは山上より吹下す風をいふ

はて、まれぶさといひ續け難く、誠に及ぶまじき委なりと評せるはいかゞ。餘り巧に過ぎたる處ひあるものを。

○はげしかれとは 烈しくあれどはなり○祈らぬものを 觀音様に祈らないものをマアにて、例の餘情をこめたり○此歌千載集戀部に「權中納言俊忠の家に戀の十首の歌よみ侍りける時、祈不逢戀といへる心を」とあり。

○一首の意は、泊瀬の觀世音よ、初めよりつれない人を、いよくつれない人になれどは、祈りはせぬものをマア、何故に一層つれなくはせしぞ、聞えぬ事なりとなり。

藤原基俊

基俊は右大臣俊家の子なり、文才あり、和歌を善くし、萬葉に通ず、源俊頼と並び稱せらる、從五位下左衛門佐たり、保延四年薨髪して覺舜と號す、著す所、悅目鈔、新三十六歌仙、新撰朗詠集等あり。

ちきり置きしとせもが露を命にて

あはれことしの秋もいぬめり

○ちきり置きし 御約束申して置きしなり、こは基俊、子息の興福寺の僧都光覺を、

○景樹は袖中抄にある方を執りて、風体優美なられば、千載集の撰者俊成卿の、かくば引直したるならむ、されど、露を秋と命として

去にたりといふ節に聞えて、秋か過す事にはならずといへるは、さる事なり。要するに、前の後編及びこの作者は、當時一奴にいはれたる上手なれば、この歌ごもの外に、今少しよき歌多かるものを、いかにぞや。

維摩會の講師とせむ請をたび／＼なして、前太政大臣忠通公に契り置きしなり○させもが露を命にて、させもはさせもぐさの略にて、させもぐさはさしもぐさの轉なり、忠通、基俊の請に答へて「まめちが原」と仰せられけり、其故は清水の觀音の御歌とて、「猶頼めまめちが原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは」の義によりて、われ世の中にあらむかぎりは、頼みにせよと仰せられし、其歌の中のさしもぐさの語をとりていへるにて、頼みにせよと仰せられし故、其はかない惠の御語を命と頼みての意なり、露ははかない惠の意、秋の縁にいひたり○あはれ 感歎詞、ア、と全じ○ことしの秋もいぬめり 維摩會は十月十日より十月十六日までありて、講師は九月に定めらるゝにて、衆僧の望む名譽の事なり、今年の秋も暮れて行く様子であるア、の意、いぬは去ぬにて、めりは現在の推量をあらはす助動詞にて見えありの約○此歌千載集總部に「僧都光覺、維摩會の講師の請を、たび／＼もれにければ、前の太政大臣に恨み申しけるを「まめちが原」と侍りけれど、また其年も洩れにければ遣しける」とあり、袖中抄には初句いかにせむ、下句頼めし秋の暮れはてぬめりとあり。

○一首の意は、御契りなされて頼みにせよと仰せありし、はかない惠の語を、我が一

命の如くに頼りとして居るに、ア、今年も講師に請ぜられずして、其御沙汰もあるべき秋も、暮れて行く様子であるワイとなり。

法性寺入道前關白太政大臣

忠通は關白藤原忠實の長子にて、頼長の兄なり、安和二年、年廿五にして關白たり、崇徳、近衛の朝、攝政關白となり、後白河帝位に即きて、又關白たり、別業を法性寺の側に造る、世に法性寺關白と稱す、長寛二年薨す、年六十八、法性寺關白記は其日録なり、最も書を善くし、一家をなす、法性寺様と稱す。

わたの原漕ぎ出でて見れば久方の

くもゐにまがふ沖つあらなみ

○桑太は長高くして、堂々たる大臣の風以て見つべし。この百首のうちにては勝れたる方なれど、元より題詠にして、神來の句ならざる爲に、はた、一般に氣象衰頹したる、保元時代の音なるを免れざ

○わたの原 海上になり、原は廣き所をいふ詞○漕ぎ出でて見れば 船を漕ぎ出して、眺むればの意○久方のくもゐ 久方は枕詞、委しくは前にいへり、くもゐは雲居にて、雲の在る所即ち空のことなり○まがふ 混ふにて、紛れて區別のつかぬをいふ○沖つ

る故に、いさゝか感情の淺かる心地す。詞花集秀歌十首の一なり。

老らなみ 沖の白浪と全む○此歌詞花集雜部に「新院崇徳位におはしましし時、海上眺望といふ事を詠ませ給ひけるに詠める」とあり。
○一首の意は、海上に船を漕ぎ出だして、遙に眺めやれば、空と沖の浪とが連いて居つて、其區別がわからぬ、ア、廣いとなり。

崇徳院

第七十五代の帝にして、御名は顯仁、御父は鳥羽帝、母は藤原璋子なり、保安四年御年五歳にて即位したまふ、永治三年十二月鳥羽法皇、強ひて皇太弟近衛帝に位を譲らしむ、天皇不平なり、後白河天皇御位に即くに及び、遂に保元の亂ありて、讃岐の志度に移され給ひ、長寛二年八月御年四十六にて崩す、讃岐國阿野郡白峯に葬る、壽永三年廟を春日河原に建て、粟田宮といふ、後、明治元年今出川飛鳥井に遷祀し、白峯と稱す。

瀬をはやみ岩にせかるるたき川の

われても末にあはむと思ふ

○久安百首のは原作の御製にて、詞花集のは、攝者顯輔卿の引直

し申しならむ。顯輔の機急強弱全然反對にて、意氣さへ少し相違せり。いづれにてもあるべきやうなれど、猶緩く弱く行き憫む、谷川の方、眞實ある趣きならむ。

○瀬をはやみ 瀬が早さにの義、瀬は川の淺き所にて、をは感歎の意をあらはす詞、みは形容詞の語根に添へて、「が故に」「さに」等の義を顯はすこと、前にいへり○岩にせかるるたき川の 岩に懸きとめらるゝ瀧川の如くにの意にて、瀧川は水の疾く奔りて、激る水をいふ○われても 別れて居るを、水の堰かれてゐるゝにかけていへり○末にあはむと思ふ 水の川下では合ふ如くに、行末は逢うと思ふの意○此歌詞花集戀部に「題知らず」とあり、久安百首には、初句「ゆきなやみ」三四の句「谷川のわれて末にも」と出でたり。

○一首の意は、瀬が早さに、岩に堰かるゝ瀧川の水の如くに、人目にせかれて、逢はずに別れて居ても、其水が、末は一所に合ふ様に、行末は必ず逢はうと思ふとなり。

源兼昌

兼昌は美濃守俊輔の子なり、從五位下皇后宮大進たり、天永三年卒す。

あはぢ島かよふ千鳥の鳴くこゑに

いく夜ねざめぬすまの關もり

○四句を幾夜幾々めめらむの意に解ける注は當らず。幾夜も幾々またりの意にて、作者み

づから須磨の關守の身
になりて歎めり。一首
の仕立風情ありげなれ
ど、須磨詠流の歌なる
事は免れず。

○あはち鳥 須磨浦から淡路島へにて、淡路の國のことなり、須磨浦と相對して近し
○かよふ千鳥の鳴くこゑに 飛びて行く千鳥の鳴き聲の哀れなるにの意、千鳥は鳴、
鶴鶴に似て小く、冬多く河海の邊に群れて鳴く、種類多し○いく夜ねざめぬ 幾晩も
目を覺したの意なり○すまの關もり 須磨の關守はの意、須磨浦は攝津國八部郡、東
西須磨兩村の海濱を喩へるにて、名所なり、西南に近く淡路島を觀る、關屋の跡今なき
あり○此歌金葉集冬部に「關路の千鳥といへる事をよめる」とあり。
○一首の意は、冬の夜のさびしさに、須磨の浦から淡路島へ、もの哀れに鳴いて通ふ
千鳥の聲に、幾晩も目を覺した、須磨の關守はと、餘情を籠めて吟言にて結びたり。

左京大夫顯輔

顯輔は正三位修理大夫顯季の季子なり、堀河、鳥羽、崇徳、近衛の四朝に仕へて、
正三位左京大夫皇后宮亮に至る、久壽二年五月出家す、和歌を善くす、崇徳天皇の
勅を奉じて、詞花集を撰す。

あき風にたなびく雲のたに間より

○これも久安百首の
たいふふ體とあるを正

亮

もれ出づる月の影のさやけさ

しぞす。さるは、あら
く、い、い、打、吹、きたる、秋
風に、空、な、雲、の、立、動、
く、さ、ま、見、え、て、月、の、も
れ、出、る、に、も、由、ある、面、白
き、景、氣、なる、を、思、ふ、べ
し。い、わ、に、も、け、高、き、歌
と、細、川、陶、器、は、評、し、景
樹、は、よ、た、め、で、た、し、と
まで、賞、讃、せ、り。

○あき風にたなびく雲の 秋風の爲にたなびく雲のにて、たなびくは、靡くをたの發音
にて強めたるにて、雲の薄く長く靡くとなり○たに間より 中絶えたる所からの意○
もれ出づる月の 漏れて出づる月の意○影のさやけさ 光の明けき事よの意、影は月
の光の照らすをいへり、さやけさは形容詞の語根に、さを添へて文の末を結ぶ一種の
用法にて、のがの末を結ぶに限れり○此歌新古今集秋部に「崇徳院に百首歌奉りける
時」とあり久安百首には二句「たなふ雲の」と出でたり。

○一首の意は、秋風に吹かれて柵引く雲の絶え間から、ヌット漏れて出る、月の光の
さやけきことごと、秋月を賞でたるなり。

待賢門院堀川

堀川は神祇伯顯仲女にて、待賢門院に仕ふ、又、兵衛ともいふ、待賢門院は閑院大納
言公實卿の女、白河帝の御養子となり、鳥羽帝の后宮たり。

○君が一夜の情の爲に、妾が百年の身を誤まるさひけむも、ある折や、其は下めならむ。女の歌としては哀深く、調づかいがなれど、なほ自然な失はす。

ながからむ、ころもあらす黒髪

みだれて今朝は物をこそ思へ

○ながからむ 契りの行末長くあらむの意にて、黒髪の縁語なり○ころもあらす 心變りするかせぬかの心も分らずなり、まらずはまられずの罫○黒髪のみだれて 朝寐髪の如く心が亂れての意にて、黒髪は亂れてといはむために、昨夜男と契りし朝寐髪の姿を、すぐに採りていへるなり○物をこそ思へ 物思をするツア、の意、思へは思ふと意全じにて、こそと強く係りたれば、まか語尾をかへたり、されど多少感動の意あり○此歌千載集戀部に「百首の歌奉りける時、戀の心をよめる」とあり。久安百首には初句「長からぬ」と出でたり。

○一首の意は、よべ始めて契をして、行末長くとはいひかはしたれど、末長き心の程も知り難ければ、心がさま／＼に亂れて、限りなき物思ひをするツイとなり。

後徳大寺左大臣

實定は右大臣藤原公能の子なり、壽永二年内大臣となり、文治二年右大臣、五年七月左大臣に至る、建久二年六月薨髪して如圓と號し、この歳薨ず、年五十三、祖父實能も左大臣たりしによりて、後徳大寺左大臣と稱す、家に藏書多く、和漢都て萬餘卷あり、最も和歌を好み、一堂を構へて、常に歌人を延き、嘯咏して娛みたりといふ。

ほどとぎす鳴きつる方を眺むれば

ただありあけの月ぞのこれる

○ほどとぎす 鳴く聲を名どす、夏の初めより晝夜をわかず鳴きて、秋に至りて止む、別名さでの田長といふ、霍公、郭公、杜鵑、子規、杜宇とも書す○鳴きつる つるは現在の完了をあらはす助動詞にて、今鳴いたばかりの意なり○眺むれば 見やればの意にて用ひたり○ありあけの月 前にいへり○此歌千載集夏部に「曉聞時鳥といへる心をよみ侍りける」とあり。

○一首の意は、夏の曉に、時鳥が鳴きつるはとて其方を見やれば、時鳥の影は見えずに、

○有情の動、非情の靜、おのづから取合はれて、あまた響けす、只ありにいい響けたるに、景氣限りなく覺ゆ。時鳥の歌多かる中に、二さは下らざる傑作ならむ。

たゞ有明の月ばかり、空に残りて見ゆるとなり。

道因法師

道因本名は敦頼にて、治部丞藤原清孝の子なり、崇徳の朝に仕へて、從五位上左馬助となり、尋て馬寮使となる、後薙髮して道因と號す、平素心を和歌に潜め、年八十にして、毎月徒歩して、住吉社に詣り、秀歌を得むことを祈りしといふ。

おもひわびさても命はあるものを

憂きに堪へぬはなみだなりけり

○思へさても、そむるにほろも涙をわりなく思へるより、命だにさてもあるものを、如何なれば涙は、怪しめるが、則ち戀の實情なり。箇中の消息、血なく涙なき人さ歸るべからず。

○おもひわび 戀人を思ひわづらひての意○さても さは然の約言にて、それでもなり○命はあるものを 命は保へて死なずにあるものをマアの意○憂きに堪へぬは づらに耐へられぬものはにて、ぬの下に、ものといふ跡言を畧きたり○なみだなりけり 涙であるワイの意○此歌千載集戀部に「題まらず」とあり。

○一首の意は、このやうにつれない人を、思ひ煩ひても、それでも命は死なず保へて

あるものをマア、つらいに耐へられぬものは、外ならぬ涙にてあるワイとなり。

皇太后宮大夫俊成

俊成は權中納言俊忠の子なり、初め顯廣といふ、歌を基俊に受く、後鳥羽帝に仕へて、皇太后宮大夫正三位に至る、世に五條の三位と稱す、安元二年出家釋阿と號す、嘗て後白河天皇の勅を奉じ、千載集を撰す、元久元年薨す、年九十一、古來風跡抄の著あり、家集を長秋詠草といふ。

世のなかよ道こそなけれ思ひいる

やまのおくにも鹿ぞなくなる

○二句いさゝか、同屋は、ぬれひあり。その用法は不快なり。さるは、やうに強く係る時は、下に反對の意の顯はるゝが、その正格なればなり。上の嘉慶法師が「人こそ見れ秋は來にけりと詠めるを思ひ合はすべし。

○世のなかよ 世の中はヨの意にて、よは感歎詞○道こそなけれ すべきやうのなしといふ意、こそと強く係りたれば、なけれど結びたるなり、こゝは憂きことを逃るべき、仕方はないワイの意にて、道は山へ思ひ入るの縁語○思ひいる 深く思ひこむ事にて、山の奥へ隠遁して入ることをかけたり○鹿ぞなくなる 鹿が悲しう泣くワイに

この作者、他に名歌い
と多かり。これはこ
にもあらず。

て、なるは感歎の意をあらはす助動詞なり○此歌千載集雜部に「述懷百首の歌よみ待
りける時 鹿の歌とてよめる」とあり。

○一首の意は、あはれ世の中はヨ、仕やうはないタイ、人の居らぬ奥山はど、思ひ込
むで這入れば、その山の奥にも、鹿が物悲しう鳴くタイ、ア、世の中は何處も忙しき
ものなりとなり。

藤原清輔朝臣

清輔は左京大夫顯輔の子なり、鳥羽上皇の憫みを受け、五位を授けらる、尋で正四
位下皇太后宮大進兼長門守に至る、心を歌學に潜め、俊成、僧西行と並び稱せらる、
嘗て二條天皇の勅を奉じて、續詞花集を撰す、書成りて帝崩じ、奏覽を経ざるを以
て、勅撰に列せず、識者これを惜む、治承元年卒す、著す所、他に、與義抄、初學
抄、袋草子等甚だ多し。

ながらへば又この頃やあのばれむ

憂しと見し世ぞ今はこひしき

○歌は理詰めに詠みて
は餘韻なきものなり。
さればやうに推理的

に詠めるは、一ふしあ
りて、又面白からざる
にはあらねど、詞書さ
て情つくるないかにせ
む。

○ながらへば 此世に長らへてあらばの意○又この頃や この今の時節がまたの意、
やは指して疑ふ意の助辭○まのばれむ 慕はしく思はれむなり○憂しと見し世ぞ つ
らく思つた昔の時節がなり○今はこひしき いまは戀しく思ふとなり○此歌新古今集
雜部に「題知らず」とあり家集には「二條右大臣まだ中將にておはしけるころ遣しける」
とあり。

○一首の意は、生きながらへて此世にあらば、この今の憂き時が、慕はしく思はれや
せむ、憂いと思ひし昔しの時節が、今は戀しく思はるゝにつけてもとなり。

俊恵法師

俊恵は源俊賴の子なり。其家を歌林苑と號し、毎月歌人を集めて和歌の會をなせ
つゝなり。

よもすがら物思ふ頃は明けやらで

閨のひまさへつれなかりけり

○閨の頃の白まねなつ
れなしと擬人法もい
へるが、一寸なつしき
所なり。

○よもすがら 夜も盡の意にて、俗に夜通しなり○物思ふ頃は 物思ひをして、早く夜が明けよかしと思ふ頃はの意○明けやらで 夜が明けやらすしての意○闇のひまさへ 寐屋の板戸の隙間までがの意、闇は寐屋にて、夜寐る室なり、さへは一つある上になほ添はる義の助辭にて、人のつれなき上にの意を籠めたり○つれなかりけりつれなくあるワイなり○此歌千載集戀部に「戀の歌とてよめる」とあり。

○一首の意は、夜通しつれない人のために、物思ひする頃は、早く夜が明けよかしと思へど、夜がなか／＼明けやらすして、闇の隙間までがつれないワイ、明るくならずしてとなり。

西行法師

西行は本名は佐藤義清にして、左衛門尉康清の子なり、鳥羽上皇に仕へて、北面の士となり、左近衛尉となる、年二十三、遁世の志を達し、圓位又西行と號す、それより四方を周遊し、到る所吟咏す、廬を伊勢二見浦に結び、嘯咏自適、建久元年二月十六日京都に寂す、年七十三、家集を山家集といふ、著す所撰集鈔等あり。

廬

なげけとて月やはものを思はする

かこち顔なる我がなみだかな

○この歌は、上人、壯時の作にして、決して得たるものに非ず。故にこれを以て、直に上人の風調は推し難し。人爲の彫琢を借らざる天然の節奏は、山家集に就きて見るを要す。

ある人の、初句をこゝろに過ぎたりとて久方のなど、直し試みたるは、更に歌の姿なと思はず、下句との調和如何なまはらざる餘蘊なり。

○なげけとて

歎けというてなり○月やは物を思はする

て、月が物を思はするか、思はせはせぬの意となる○かこち顔なる

るにて、かこちは假言を動詞と志たるにて、こゝにては戀故、月を見てこぼす涙を、

月が物思ひをさせて溢さする如くにかこちくる意なり○なみだかな

○此歌千載集戀部に「月前の戀といへる心をよめる」とあり。

○一首の意は、歎けというて、月が物思ひをさするか、させはせぬ、戀故に、月を見て、

何となく物悲しく涙の出づるを、月が涙を溢さする如く、かこちけ顔なる、我が涙

であるかなとなり。

寂蓮法師

寂蓮は藤原定長とて、僧俊海の子なり、叔父俊成養ひて子となす、左中辨中務少輔

從五位上たり、俊成の子定家生るゝに及びて、僧となり寂蓮と號す、丹青を善くし、歌に工なり、建仁二年七月廿日寂す。

むら雨の露もまだひぬまきの葉に

霧立ちのぼるあきのゆふぐれ

○時の間に、雨又露と立ちかはりゆくは、水蒸氣多き深山中の秋晩の實景にして、描寫の妙は、哈油繪を看るゝ如し。

○むら雨 一群づつ、強く降り過ぐる雨をいふ○露もまだひぬ 村雨の露もまだ乾かぬなり○眞木 まは稱美する語にて、柏、杉等の有用の木をいふ○あきのゆふぐれ 秋の夕暮の哀れなるかなの意を、轉言にていひ切りたり○此歌新古今集秋部に「五十首の歌奉りける時」とあり。

○一首の意は、さつと一まきり降りたる雨の名残の露が、まだ乾かぬ深山の立木の葉に、霧が立ちのぼりて、闇くなりて行く、秋の夕暮は、殊にあはれなりとなり。

皇嘉門院別當

別當は大皇太后宮亮俊隆の女なり、皇嘉門院は崇徳の皇后にて、藤原忠通公の女な

り、大治五年二月后となる、久安六年二月院となる。

難波江の蘆のかりねのひとよゆゑ

みをつくしてや戀ひ渡るべき

○戀歌は婉曲な尙ふが故に、おのづから物に比興し、諷託していふ事多し。されど、題詠盛りになれりしより、内容の如何か忘れて、外觀の詞華の巧にのみはしめるはくちなし。これはこの歌に就きてのみいふにあらず。

○難波江の 難波の堀江をいふ、難波は今の大阪の地にて、其昔し蘆の名所なりしなり○蘆のかりねのひとよゆゑ かりねは蒨根に假寐をかけていひ、たゞ一夜の假寐といふとを、蒨りたる蘆の根の一節残りて、江の中にあるに取合せたり、蘆のまでは、かりねといはむ序なれども、旅の意を其地方に寓したり○みをつくして 身をなくすまでもの意、身を盡してを、溲標にいひかけたり、溲標は委しく前にいへり○戀ひ渡るべき 戀ひて月日を暮すであらうを、渡ると江の縁語にいへり、べきは推量のにて、やの係りの結び○此歌千載集戀部に「攝政忠通右大臣の時、家の歌合に旅宿に逢戀といへるこゝろをよめる」とあり。

○一首の意は、難波邊の一夜の旅寐のなさけが、忘れがたくて、命をつくすまでも、戀ひて月日を暮すであらうかとなり。

式子内親王

式子内親王は後白河帝の皇女にして、御母は大納言藤原季成之女、從三位成子なり、和歌圖書を善くす、平治元年賀茂齋院となり、三宮に准ず、後薙髮して法名を如法といひ、高倉宮と稱す。

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば

志のぶる事のよわりもぞする

○緒の縁にて仕立てたるは常の事にてうるさし。只結句なりぞするを未來を決定していへるが、このなかしき處。

○玉の緒よ 我が命よの意、正しくは魂の緒と書くべく、いのちをいへり、よは呼掛けの助辭○絶えなば絶えね 絶ゆるならば絶えよにて、ねは命令の助辭、玉の緒の縁によりて、死ぬることをまかいへり○長らへば 生き長らへて居らばの意、此語緒の縁○志のぶる事の 包み怵ふる事がの意○よわりもぞする 心が弱りもせむの意にて、よわりは緒の縁語○此歌新古今集戀部に「百首の歌の中に忍戀の心を」とあり。

○一首の意は、我が命よ、思ひの爲に死ぬるならば、死ぬよかし、此世に生き長らへて

居らば、包み怵ふる心が弱りて、色に顯はれもせむとなり。

殷富門院大輔

大輔は從五位上信成の女にて、殷富門院に仕ふ、門院は後白河院の皇女、式子内親王の姉君なり、安德、後鳥羽二代の准母、順德帝の養母なり、文治三年六月殷富門院と號す。

見せばやな雄島の海士の袖だにも

ぬれにぞ濡れし色はかはらず

○わが袖の事を、つづ詞に顯はさずして、見せばやなと袖だにもとの照應にて思はせたるは巧なり、四句の詞づかい妥當な欠けらうへに、紅涙は、當時の歌人の好みて用ひたる事なりといへ、實にあるべくも覺えれば、あまり感心せず。

○見せばやな 見せたいものチャナアの意にて、ばやは希望の意をいふ助辭、なは感歎詞○雄島の海士の 雄島は陸前松島に在り、海士は海人の零にて、海に漁りする者○袖だにも 袖でサへもなり、例の言外に意を重くしたり○ぬれにぞ濡れし 濡れどばしたの意、濡れを重ねて強いへり○色はかはらず 色は變らないにて、だにもの語によりて、我が袖の色は變れりの意をこめたり○此歌千載集戀部に「歌合またりける

時、戀の歌とてよめる」とあり。

○一首の意は、あの雄島の海人の漁りの爲に、濡れどばしなる袖ですへも、濡れてあるのみで、色は變らないものを、我が袖は戀しい〜と思ふ血の涙に、濡れるばかりか、色までも變り果てたを、我が戀人に見せたいものぢやナアと、戀人のつれなきを嘆きたるなり。

後京極攝政太政大臣

藤原眞經は後法性寺關白兼實の子なり、文治五年權大納言、建久六年内大臣となり、正治元年左大臣、建仁二年十二月攝政となる、元久元年十二月太政大臣たり、博く衆藝に通じ、最も和歌に巧なり、後鳥羽上皇に推重せらる、建久元年七月夜暴に薨ず、後京極といふ、殿記といふ日録あり。家集を月清集といふ。

きりくす鳴くや霜夜のさむしろに

ころも片敷きひとりかも寝む

○この歌は、たゞの四季の歌には非ずして、戀歌なる事は、上の柿本人丸の作とある「な

がくし夜をの歌を思ひ合せて知るべし。さて、此下句萬葉集に同一のが見えたるは、作者の思ひ忘れて詠まれしものならむ。本居宣長は、萬葉古今の二集中に入れても勝れて見ゆる歌と稱へたれど、さまでにはあらす。さるは、下句極めたる古詞なるに、二三の句のいいけ後世風なれば、何となくそぐはぬ心地す。この作者秀歌他に多し。

○この歌によりて、沖の石の讃岐と異名つき

○きりくす 今こほろぎといふ蟲にて、リウ〜と鳴き、蟋蟀とかく、今のきりくすは、蠡斯とかきて、キイストヨと鳴き、古名こほろぎといふ、古今相反する名となれり○鳴くや 鳴くマアにて、やは間投の感歎詞○さむしろに さは發語にて、むしろは古は廣く敷物の稱、さむしろといひて、寒きにいひかけたり○ころも片敷き 衣の片袖を敷くとにて、ひとり寝るをいふ○ひとりかも寝む ひとり寝る事かマアにて、かもは感歎詞にて、寝むかもと見るべきこと上にいへり○此歌新古今集秋部に「百首の歌奉りける時」とあり。

○一首の意は、物哀れにきりくすが鳴くマア、霜夜の肌寒き寐床に、個もなくて獨り寐る事かマア、つらいことよとなり。

二條院讃岐

讃岐は源三位頼政の女なり、女ながら學を好みて、十三經を通讀せりといふ、二條帝に仕ふ、帝は後白河帝の御子なり。

わが袖は汐干に見えぬおきの石の

たる、名譽の事なり。
 言ひ見付け物をして、詠
 みたるは、なほ上手の
 仕業なるべし。

人こそ知らねかわく間もなし
 ○沙干に見えぬ 沙干の時にも見えないの意○あきの石の 沖の石の如くにの意○人
 こそ知らね 人は知らないがマアなり、こそと強く係ればねと結びたり、感嘆の意を寓
 す○此歌千載集戀部に「寄石戀といへる心を」とあり。

○一首の意は、我が戀は深く忍びてある故に、沙干にも見えない沖の石の如くに、人
 は知らないけれどマア、袖の乾く間はなし、つらいことよとなり。

鎌倉右大臣

源實朝は頼朝の子にて、母は平政子なり、建仁三年九月從五位下に叙し、征夷大將
 軍に補せらる、建保四年十二月右大臣となり、拜賀の禮を鎌倉鶴岡社に行ひ、姪公
 曉のために弑せらる、年二十八、實朝資性溫雅なり、常に文學を好み、武事に關ら
 ず、歌を藤原定家に學び、世に稱せらる、家の集金槐集あり。

世の中は常にもがもななきと漕ぐ

あまのをぶねの綱手かなしも

○この公の歌は初中晩
 の三期に分れて、初期
 のは當世の幽玄詩を心
 掛けられ、中頃の萬

葉を生香活潑し、末の
 は更に一頓悟して、向
 上の一路をゆるる金玉
 の作多し。然るにこれ
 は、中頃のや、萬葉
 詩の模範にして、徒に、
 古人の聲色を聞く心地
 す。

○世の中は常にもがもななき 世の中は何時も變らず生きてありたいナアの意にて、常は
 無常の反對にて變りなきこと、がもは希望の助辭、なは感歎詞○なきと漕ぐ 磯邊近
 くを漕ぐの意、渚は波打際の略言なり○あまのを舟の 海人の漁りする小舟のなり○
 綱手かなしも 綱手は船にかけて引く綱をいふ、かなしは愛しにて、いとほしきにい
 ふ詞、悲しとは異なり、もは感歎詞にて、釣舟にかけて引く綱の景色の面白きを、賞
 めたいへたるなり○此歌新勅撰集羈旅部に「題知らず」家集には羈旅部に「舟」とあ
 り。

○一首の意は、世の中は何時も變らず、生きてありたいものぢヤナア、磯近く漕ぐ海
 人の釣舟にかけて、綱手引く景色が、誠に面白いマア、されば、長生を志てまたも
 來て見たいとなり。

參議雅經

雅經は藤原賴經の子なり、承久、建保の間從三位左近衛中將たり、承久二年十二月
 參議に任ぜられ、三年三月薨す、年五十二、和歌を善くし、源通具、藤原定家等と敕

を奉じて新古今和歌集を選ず、飛鳥井家と稱し、子孫永く和歌蹴鞠をもて、世に重ぜらる。

みよし野の山のあき風さよふけて

ふるさと寒くころも掃つなり

○古今集に左則
み吉野の山の白雲積
るらし故里寒くなりま
さるなりを本歌として
詠めるにて、わづかに
十四字ばかりのたがひ
あるのみ。大やう古調
さ聞ゆるを、仔細に吟
味するに、底にいささ
かの巧あるは、猶この
時代の歌なるべし。姿
も詞も意もよろしきこ
そ。

○みよし野 吉野のことなり、みは美むる意を添へていふ發語、み熊野、み空等多く用ふ○さよふけて 夜が更けてなり、さは發語にて、意義なし○ふるさと 古く物のありたりし地をさしていふ詞にて、こゝには吉野の里をいへり、吉野は昔し離宮ありて、時々行幸せられし地なればなり○ころも掃つなり 掃衣とて、衣にする織物を掃つことをいふ、なりは感歎の意をいふなりにて、俗にうつろいと譯す○此歌新古今集秋部に「掃衣の意を」とあり。

○一首の意は、吉野山から吹き下す秋風が吹きすさみて、夜更くるまゝに、寒さいやまざる頃、哀れにも吉野の里に、衣を掃つ音が聞ゆるタイとなり。

前大僧正慈圓

慈圓は藤原忠通の子なり、初名は道快といふ、和歌を能くす、性人を愛し、苟も一技一能あるものは養ひて棄てざりしといふ、愚管抄の著あり。建久六年十一月僧正にて、天台座主となり、後大僧正となる、嘉祿元年九月寂す、嘉禎三年慈鎮と諡す。

おふけなくりき世の民におほふかな

わが立つそまにすみぞめの袖

○おふけなく猶讀説あれど、事長ければさしおくべし。又、袖を世の民に覆ふやうに詠めるは、法華經の文句に據れるなり。この歌、五句へのいひかけ、いやしげに聞ゆ。そもそも、この僧正の歌風は、新奇を好みて、たけ卑けれど、これよりはよき歌多し。

○おふけなく 無「負氣」にて、身の分に過ぐるをいひ、俗に過分にもなど當れり○うき世の民 天下萬民の上にの意、うき世は憂き事多きは、世の習ひなれば、人間の世をいへるなり○おほふかな 墨染の袖を覆ふかなにて、天下萬民を安全なるやうにと、法師の身として祈り居るを、袖もて覆ひ慈むにかけていへり、かなは感歎詞○わが立つそまに 此比叡山の開祖傳教大師の「阿彌多眞三藐三菩提心の佛等、吾がたつ袖に冥加あらせ給へ」とよめるより出でて、もとは我が居る山の意なりしを、こゝ

には地名にとりなして、比叡山をいへり○すみぞめの袖法師の身といふことなり、僧の衣は墨染なればいふ、こゝには山に住むにかけていへり○此歌千載集雜部に「題知らず」とあり。

○一首の意は、我は比叡山に住む法師の身なれば、身の分に過ぎて、天下萬民のために、安全の祈りをする事かな、思へば過分なる我が仕業であるナアとなり。

入道前太政大臣

公經は内大臣藤原實宗の子なり、承元の初、正二位權大納言となり、後堀河の朝、内大臣より太政大臣に上る、寛喜三年病によりて出家、覺勝と號す、寛元二年薨す、年七十四、嘗て佛堂を北山に建て、西園寺といふ、因て家の名とす。

はなさをふあらしの庭の雪ならで

ふり行く物は我が身なりけり

○はなさをふあらしの 花を誘ひて吹く風のなり○庭の雪ならで 庭の花吹雪ならで

○風の庭さいふは風の吹く庭の義にて、古今集に花ちらす風の所はと詠めるにひきしけれど、なほ種やならぬ

詠法なり。歌も作り過ぎて、整衰に乏し。

しての意、花を雪に見立て、いへるなり○ふり行く物は 老い衰へて行く物はの意、年の舊り行くを、花の降り行くに懸けたるなり○我が身なりけり 年の寄るのは我が身ヂヤワイにて、けりは例の感歎の意を持てるもの○此歌新勅撰集雜部に「落花をよみ侍りける」とあり。

○一首の意は、花を誘ふ風のために、花が庭に雪のやうに降り行くが、その花にはあらずして、年の老いて舊り行くものは、却て我が身に於てあるタイとなり。

權中納言定家

定家は藤原俊成の子なり、文治五年左近衛少將となり、建保六年民部卿たり、寛喜四年正二位權中納言に至り、天福六年十二月出家、明靜といふ、仁治二年八月薨す、年八十、世に京極中納言と稱す、天資和歌に長じ、著書甚だ多く、新古今集、新敕撰集、詠歌大概、拾遺愚草等あり。子孫和歌所の實權を握り、二條冷泉の二流に分れて、數百年の間歌學界を支配きたり。

來ぬ人をまつほのうらの夕なぎに

○上にある行平朝臣の歌のまゝに似たり。

こころなくくくくくくく
で感氣に乏し。さはい
へ、さすがに上手の作
なれば、圖の細工は器
用にして、なかく手
のこみたるものなり。

焼くや藻鹽の身もこがれつつ

○來ぬ人をまつほのうらの 來ぬ人を待つといふ意を、松帆浦にいひかけたり、松帆浦は淡路國三原郡に在り、古くはこの海を筍飯の海といへり、申世今の名となる、○夕なぎに 夕方に浪風の和きたる時にて、浪風の静まりたるをいふ○焼くや藻鹽の 焼く藻鹽の如くの意にて、やは間投の感歎詞、藻鹽は海藻を掻き集めて乾して、沙水を汲みかけ、沙の染み着きたるを、焼きて水に掻きまぜ、其上澄を釜にて煮て、鹽を取るものなり○身もこがれつつ 我が身も焦れつつにて、藻鹽の焦るにかけたり、例の餘情を含めたり○此歌勅撰集戀部に「建保六年内裏歌合に」とあり。
○一首の意は、來もせぬ人を、待つつらさは、松帆の浦の夕なぎに、焼く藻鹽の如くに、我が身も焦れつつて、甚だわびしとなり。

從二位家隆

家隆は中納言藤原光隆の子なり、元久三年正月宮内卿に任ぜられ、文曆二年九月從二位に叙せらる、嘉禎二年病を以て薨髮し、佛性と號し、三年薨ず、年八十、壬生

二位と稱す、和歌を善くし、定家と並び稱せらる、元久中、定家と新古今集を撰す、家隆咏歌に心を籠め、作る所、實に六萬首なりといふ。

風そよぐならの小川のゆふぐれは

みそぎぞ夏のゑるしなりける

○初二句の細やかなるは、この頃の歌風なり。涼しく秋の二語を排まつて、秋の如く涼し、意をみくらしたるは、巧なれど、優れたる歌にはあらず。この作者及び、前の歌の作者定家も、他に名歌として採りつべき作、極めて多し。

○風そよぐ 風がそよぐと木の葉に吹きて音するなり○ならの小川の 山城國葛野郡に在り、風が櫓の木へ吹くを地名にいひかけたり○ゆふぐれは こゝまでは皆涼しき景色をいへるなり○みそぎぞ 禊する事のみぞの意、禊は身に罪あり穢ある時、祓ふために、河原に出でて、川にて身を濯ぐことをする儀式にて、六月十二月との晦日に行ふものなり、こゝにては夏の禊をいへり○夏のゑるしなりける 夏の證據であるタイなり、走るしは他の物と紛れぬ證となる物をいふ○此歌新勅撰集夏部に「寛嘉元年女御入内の御屏風に」とあり。

○一首の意は、櫓の葉へ風がそよぐと吹く、ならの小川の夕暮は、涼しくて秋と思はれるが、たゞ禊をする事のみぞ、夏の證據であるタイとなり。

後鳥羽院

第八十二代の帝にして、御名は尊成、高倉帝の御子なり、御母は贈左大臣信隆の女藤原重子なり、元暦元年踐祚し給ふ、在位十五年にして、位を土御門帝に譲らせ給ひ、薙髮して眞然と號し、院にありて、政を決せられぬ、承久三年北條義時と事あり、隠岐に遷され延應元年二月隠岐に崩す、山城愛宕郡大原法華堂に葬る、御年六十三、和歌に巧なることは世の稱する所なり。

ひともし人も恨めしあぢきなく

世をおもふ故にも思ふ身は

○なほは愛の意にて恨めしの情に對へたるなり。思ふを打重れたるに、聲調讀ひて、いと饒しく聞ゆ。
この天皇および次の順徳天皇は代々の帝王の御中にては、殊に斯道の達者におはしければ、この外にいと饒れ

○ひともし 人物も惜しく思ふの意にて、然るべき眞臣の、今は地下の人なるを惜しく思召さるゝなり○人も恨めし 我が儘を振舞ふ人々も恨めしく思ふの意、北條義時の如き無道の臣下の、いま在るを恨めしく思召さるゝなり○あぢきなく 味氣無し
の意、何事も心に叶はぬ事にいふ詞にて、面白みなくの義○世を思ふ故に 世の中を

たる大御歌多かる事を記し置よ。

あぢきなく思ふ故にて、此時は鎌倉の勢、盛にて、政事等總べて心に任せ給はねばなり○ものおもふ身は 色々ど心を碎きて物思ひをする身はにて、此句の下に、上の一二句をつけて見るべし○此歌續後撰集雜部に「題知らず」とあり。

○一首の意は、天下の事心にまかせずして、世を面白からず思ふ故に、色々ど心を碎きて物思ひをする身には、すぐれたる人物の惜しくも思はれ、今在る臣下を恨めしくも思はると、儘ならぬ世を御嘆息あらせられしなり。

順徳院

第八十四代の帝にして、御名は守成、後鳥羽院の御子にて、御母は贈左大臣範季の女藤原重子なり、承久四年十一月踐祚せらる、後鳥羽院と謀りて、北條義時を討たむとして敗れ、ために佐渡に遷され給ひぬ、仁治二年九月十二日佐渡に崩す、御年四十六、山城國愛宕郡大原陵に葬る、和歌を能くし給ひ、八雲抄の御著あり、又禁秘抄を撰ばる。

百しきやふるき軒端の志のぶにも

○これおとび、上の後鳥羽院の御製は、善惡

なまかう申すべきに非
ず。是れ、うれし、
悲し、恨めし、惜し、
おはれ。

なほあまりある昔なりけり

○百しきや 禁裡の事なり、やは例の呼びかけの助辭なり、禁裡の事を百しきといふは、もど大宮の枕詞なりしを、轉じて直ちに、大宮即ち禁裡をいふに至れるなり、其意は百石城にして、皇城の堅固なるをいふより、枕詞としたるなりとぞ、又禁裏は百官の座ある故、百敷の心なりともいふ○ふるき軒端の 大宮の荒れたるをいへるなれば、帝位の衰へたるを裏に籠めたり○まのぶにも 昔を慕ふことを、古き軒端などに生ふる忍ぶ草にいひかけたり、古の盛なる帝位を慕ふにも意○なほあまりある昔なりけり ヤハリ忍ぶに餘りある昔であるタイにて、今のいたく衰へたるを、昔の盛なるに比べて歎かれ給ひしなり、鎌倉北條の暴虐を惡ませたまふ御心推するに餘あり○此歌續後撰集雜部「題知らず」とあり。

○一首の意は、禁裏の軒端に忍ぶ草が生ふるまで衰へたる世なれば、昔の帝室の盛なる事を思ひ慕うても慕ひ切れずして、ヤハリ慕ふに餘りある昔であるタイ、となり。

どはり

明治三十三年七月廿七日印刷
明治三十三年八月三日發行
明治三十三年十一月八日再發行
明治三十四年十一月十一日發行
明治三十五年五月廿五日發行
明治三十九年四月十日發行

正價金貳拾五錢

金子元臣

柴山啓一郎

三樹一平

清水鶴松

相清舍

著者權所有

發行者

著者

著者

印刷者

印刷所

東京市神田區錦町一丁目十番地

東京市神田區錦町一丁目二番地

東京市神田區錦町一丁目二番地

發

行所

(東京市神田區錦町一丁目十番地)
(特電話本局二四三八番)

明治書院

1001975612

なごかう申すべきに非
ず。是れうれたし、
悲し、恨めし、憎し、
あはれ。

なほあまりある昔なりけり

○百しきや 禁裡の事なり、やは例の呼びかけの助辭なり、禁裡の事を百しきといふは、もと大宮の枕詞なりしを、轉じて直ちに、大宮即ち禁裡をいふに至れるなり、其意は百石城にして、皇城の堅固なるをいふより、枕詞としたるなりとぞ、又禁裏は百官の座ある故、百敷の心なりともいふ○ふるき軒端の 大宮の荒れたるをいへるなれば、帝位の衰へたるを裏に籠めたり○まのぶにも 昔を慕ふことを、古き軒端などに生ふる忍ぶ草にいひかけたり、古の盛なる帝位を慕ふにもの意○なほあまりある昔なりけり ヤハリ忍ぶに餘りある昔であるツイにて、今のいたく衰へたるを、昔の盛なるに比べて歎かれ給ひしなり、鎌倉北條の暴虐を惡ませたまふ御心推するに餘あり○此歌續後撰集雜部「題知らず」とあり。

○一首の意は、禁裏の軒端に忍ぶ草が生ふるまで衰へたる世なれば、昔の帝室の盛なる事を思ひ慕うても慕ひ切れずして、ヤハリ慕ふに餘りある昔であるツイ、となり。

どはり

明治三十三年七月廿七日印刷
明治三十三年八月三日再版發行
明治三十四年十一月十一日三版發行
明治三十五年五月廿五日四版發行
明治三十六年四月十五日五版發行

正價金貳拾五錢

著者權所有

著者 金子元臣

著者 柴山啓一郎

著者 三樹一平

著者 清水鶴松

著者 相清舍

發行者

印刷者

印刷所

東京市神田區錦町一丁目十番地

東京市神田區錦町一丁目二番地

東京市神田區錦町一丁目二番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目十番地
(特電話本局二四三八番)

明治書院

1007
—
P

1007
—
P

Table with 10 columns and 10 rows of faint, illegible text.

